

種市の歴史

(原始—中世)

種市町諸遺跡の調査報告

種市町役場

種 市 の 歴 史
(原始—中世)

種市町内諸遺跡の調査報告

草 間 俊 一

目次

序文 町長 高城 専太郎 …………… 4

前町長・県会議員 館石 基治 …………… 5

久慈高校種市分校主任 長岡 善一郎 …………… 6

図版目次と解説 …………… 7

図版 …………… 11

挿図表目次 …………… 11

前篇 種市の歴史

才一章 序論（歴史理解のために）…………… 3

1 種市の歴史の書き方…………… 3

2 昔の歴史と今の歴史…………… 4

3 大和国家の発展と東北の経略…………… 6

4 二戸の天台寺…………… 7

5 蝦夷について…………… 8

才二章 原始時代の種市…………… 12

1 人間と道具…………… 12

2 旧石器文化…………… 14

- 3 狩猟採拾の生活 14
- 4 縄文式土器 16
- 早期 前期 中期 後期 晩期
- 才三章 上代の種市 20
- 1 彌生文化 20
- 2 古墳文化と大和文化 21
- 3 土師器と農耕生活 23
- 4 平安時代の種市 25
- 角浜の千人塚
- 5 安倍・藤原時代の種市 27
- 才四章 中世の種市 28
- 1 鎌倉時代の種市 28
- 2 南北朝時代 30
- 3 室町時代の種市 31

後篇 種市町内諸遺跡調査報告

- 才一章 調査前の記録 37
- 才二章 調査の経過 39
- 才三章 才三回調査諸遺跡の概況と出土遺物 41
- 1 ゴッソウ遺跡 41
- 2 有家上のマツカ遺跡 45
- 3 大宮遺跡 48
- 4 高取遺跡 58

結 語

- 5 城内遺跡 54
- 6 館野遺跡 58
- 才四章 その他の遺跡調査 59
- 1 昭和三十六年度遺跡調査 59
- 2 その他の調査記録 60
- 結 語 62
- 町内諸遺跡表名表 65
- 町内諸遺跡分布図 67

陸中海岸の南半は沈降海岸であり、吾が種市町を含む北半は所謂隆起海岸であるといわれている悠久たる日本列島形成の地質年代についてはいざ知らず、種市町の海辺山間に、はじめて居住せし吾々の先人はいかなる人々であり、又それは何時頃であつたらうか。その人々が採取漁撈より農耕に移行した年代、又蝦夷征伐の奈良平安時代、鎌倉にはじまる封建時代、戦乱の激しい中世にあつてこの町の住人達は、これらの波にいかに対処して来たか。これは単に私一人ではなく、ひとしく郷土人の抱く興味疑問であると思う。かゝる究明は所詮、考古学者はじめ歴史学者にまつより外に方法のないことであつた。

前町長館石基治氏は、かゝる地方文化史的意義を高く認識せられ、その在任中において企画着手し、既に町内の遺跡を発掘。縄文時代より土師時代に亘る広汎、且つ貴重な出土品を見るに至つた。岩大史学研究室に委託中の土器も最近殆ど復原され、図版凸版等一切の出版準備が完了し、私の町長就任後間もなくこれが刊行の運びとなつた事は、文化財保護をたてまゑとする地方自治関係者として心から喜びにたえないところである。

本書は日本中央の歴史の流れを軸として東北開拓と関連せしめつつ町内出土品の時代考証を明確に解説すると共に、学問的権威を貫ぬいて編集したものであつて、必ずや町民各位に吾が郷土再認識の機会を与え、愈々愛郷の念を深め、次代を担う青少年諸君に心よりどころを提供するものと信じている。

御多忙な研究の余暇を割愛されて本著作に専念下さつた岩大草間俊一教授並びに久慈高校種市分校長岡善一郎先生、又貴重な資料提供を快諾された当町郷土史研究家佐々木剛一氏、玉沢重作氏など、発掘を承諾された土地所有者各位に対し厚く御礼を申し上げる次才である。

昭和三十八年六月十日

種市町長 高 城 専太郎

序 文

種市町の磯辺に、昼夜をおかず打ち寄せたる太平洋の浪は、幾万幾百万年の昔よりその姿を変えず営みをつづけて、やむことを知らない。この白砂青松の美しいわが郷土に、そも人はいつ頃より住み付き、いかなる生活の態様を続けて今日に至つたものであろうか。今や広大な海岸段丘には人家相次いで櫛比し、寂寥たる往古の面影更になく、時代の進展にテンポを合わせ刻々近代的な変貌をとげつつある。

英国の歴史学者トインビーは「歴史とは過去と現在との対話である」と言っているが、郷土の先人の展開し来つた足跡を実証によつてきわめ、しかる後現在の時点に立つて来るべき種市の将来を展望することこそ、吾々の責務でなければならぬ。かくて愈々吾々の身内に真の郷土愛が生れ、うるおいある人間社会の成長もあるものと信じる。

最近「岩手県史」「八戸の歴史」の出版を見、戦後十数年にしてようやく北奥における往古より近代にいたる過程が実証されつつある時、「種市町の歴史」が私共の日程にのぼることは又必然の事といえよう。幸いにこのたび岩手県文化財専門委員岩大教授草間俊一氏をわずらわし、一昨年四月下旬より五月上旬にかけて町内の遺物包含地を発掘、その調査報告をかねて古くは縄文早期より中世種市氏にいたる資料文献に基づき「種市町の歴史」の概説を編集出版するはこびとなり、こゝに数千年にわたるわが郷土の姿が初めて科学のメスによつて吾々の眼前に現われるに至つた。これは郷土を愛する者にとつてかねて求めてよく為し得なかつたところであり、その実証的にして平明な解説に加うるに多数の図版、地図、出土地名表等を含む本書は郷土の何人も是非再読三読、常に座右にそなえて味読すべく、大方に推奨して止まないものである。そしてこれは又私の町長在任中に於ける唯一の文化的作業であつた事を思うにつけ、感慨一入である。

本出版にあたり短時日にかゝる煩瑣な著作をおねがいした草間先生、久慈高校種市分校の長岡先生はじめ、資料提供者、発掘を承諾された土地所有者各位に対し茲に深甚なる敬意と恩謝を表する次才である。

昭和三十八年六月十五日

岩手県議会議員、前種市町長 館 石 基 治

発掘印象

諦めようとした瞬間、七〇糶の地下から日本で一番古い尖底土器が二つ出る。中野の大宮という海岸の高台。種市が一番美しく眺められる小路合のゴッソウから、口径三五糶の大甕が案外浅い所に押しつぶされたまま横たわっていた。高取では、その住人がたつた今立去つた時、そのままのように皿、どんぶりの置かれた炉の跡。有家の林の崖から前期土器にまじつて石皿と丸い敲石。木の実をつぶす道具である。城内川向の畑には、ぐつと新しく奈良平安の立派な土師のつぼ。ニシヤクドウでは糸切底の皿と焼台が出る。当時の農民の顔が眼に浮ぶ。櫃割の青龍刀形石器は日本で何個という貴重品で、権力者の象徴でもあつたろうか。八木の山手、岡谷方面からは土版、土偶。小子内の犬の土製品。全てこれらは図版でゆつくり御観賞ねがいたい。北野沢の石皿を見に、佐々木角中校長の御案内で早朝訪問。霜柱の道の強行軍。本年三月十三日これを最後に仕上げ調査を終る。草間先生野田へ急行。

歴史は種市より

歴史に無縁に見えた種市町は有名な「きぬ女家族書上」という古文書をもっている。「ひかしのかとたねいち：：」にはじまるこの文書は正安三年即ち鎌倉時代の当地方の行政区画や戸籍のきめ手となる重要な中世古文書となつている。八戸の歴史の扉に印刷されてあるのはこれ。中野の尖底土器は十年前慶大発掘で大騒ぎした鮫の白浜遺跡にまさる遺物。「岩手県史」出版後のため記載されなかつたのは残念である。

まだ究明したいこと

掘るまで角の浜千人塚の正体は判然とせぬし、安藤氏、種市氏の考察も暇がある。立石といわれるストーンサークルがありそうな気がするし、貝塚も県北に少ないだけに究明の余地がある。無土器文化など何時の日かひよつと発見されるかも知れない。中世から明治にいたる文献、古老の話、伝説等を整理すれば愈々種市の通史が完成されることだろう。まだまだ知らない多くの歴史の宝庫をかゝえた種市町は魅力ある町、そしていつの日か誰かこれからの郷土史家の手によつて前者の足らざるところが補われていく事だろうし、それを私は望みたい。

昭和三十八年六月十日

久慈高校種市分校 長岡善一郎

図版の目次と解説

図版は才三回調査（昭和三十六年春）の際に発見採集した遺物を主とし、その他町内から出土している参考となる遺物と、才三回調査の状況に係る写真を示した。遺物の所蔵者名の記載のないものは、才三回調査の際に発見採集した遺物で、現在岩手大学に保管しているものもあるが、地元で保管設備が出来たら、その方向に移管したいと考えている。

図版才一 縄文式土器

- 1 図 早期尖底土器 大宮B遺跡出土 高さ四十三糶（推定）
- 2 図 早期尖底土器 大宮B遺跡出土 高さ二十四糶
- 3 図 前期深鉢形土器 ゴッソウ遺跡出土 高さ二十六・四糶
- 4 図 前期深鉢形土器 上のマツカ遺跡出土 高さ三十六・三糶
- 5 図 前期円筒形土器 上のマツカ遺跡出土 高さ二十三・三糶
- 6 図 晚期台付深鉢形土器（大洞C₂式） 八木駅前出土 高さ十七・五糶 玉沢重作氏蔵
- 7 図 後期有孔土器 和座出土 高さ十一・三糶 平内小学校蔵
- 8 図 後期香炉形土器 渋谷出土 高さ十二糶 角浜小学校蔵
- 9 図 晚期深鉢形土器（大洞A式） 高取出土 高さ十四糶 館石基治氏蔵
- 10 図 晚期壺形土器（大洞B₀式） 高取出土 現在高さ十一糶 館石基治氏蔵
- 11 図 晩期鉢形土器（大洞A'式） 高取出土 高さ八・三糶

〔解説〕 図版第一は完形または復原した縄文式土器を古いものから順次示すようにした。但し10図は7図と8図の間に入るべきものであ

図版才二 土師器と須恵器

- 1 図 甕 梅内遺跡出土 高さ二十二・八糶
- 2 図 甕（ロシキ） 梅内遺跡出土 高さ二十七・六糶
- 3 図 壺 梅内遺跡出土 高さ二十七・六糶 城内中学校蔵
- 4 図 皿 梅内遺跡出土 口径十五・二糶
- 5 図 鉢 向ながれ遺跡出土 高さ八糶 城下徳治郎氏蔵
- 6 図 鉢 向ながれ遺跡出土 高さ六糶 城下徳治郎氏蔵
- 7 図 甕 向ながれ遺跡出土 高さ三十二・五糶 城下徳治郎氏蔵
- 8 図 壺 横手出土 高さ二十三・五糶 佐々木剛一氏蔵
- 9 図 土師器の糸切底 にしやくどり遺跡出土 長岡善一郎氏蔵
- 10 図 器台 高さ二十三糶 にしやくどり出土 長岡善一郎氏蔵
- 11 図 須恵器の壺 角浜出土 現在高さ二十三糶 角浜小学校蔵
- 12 図 須恵器の壺（参考品） 胆沢城址出土 胆沢城収蔵庫保管

〔解説〕 図版第二は土師器と須恵器であるが、1図から9図までは土師器であり、その中1図から8図までは前期の土師器で、平安時代より以前に、この地方の人々の使つていた土器である。従つて、蝦

夷といわれた人々の使っていた土器はこれで、縄文式土器はそれより千年近くも前に使われていたものである。この土師器は大和文化に関係のある土器で、農耕民の使った土器である。中でも、2図のコシキは米を蒸すセイロとして用いられた土器で、底はもとともない土器である。横にしたのは底の特徴を示すためである。須恵器は角浜から出土しているものであるが、口頸部が欠失してないので、その全形を知る参考のために、胆沢城出土のものを示した。この種の須恵器は野田中学校敷地からも出土しているが、口頸部が欠失している。掘り出す時に欠けて無くなったものであると思う。

図版才三 縄文式土器と弥生式土器の破片

- 1 図 早期貝殻文土器 大宮A遺跡
- 2 図 前期縄文式土器 ゴッソウ遺跡
- 3 図 前期縄文式土器 上のマツカ遺跡
- 4 図 前期末縄文式土器(円筒下層D式) 城内学区内出土
城内中学校蔵
- 5 図 中期縄文式土器(円筒上層A式B式) 北野沢遺跡
角浜中学校蔵
- 6 図 後期縄文式土器 館野遺跡
- 7 図 晩期縄文式土器と彌生式土器 大宮B遺跡
- 8 図 彌生式土器 大宮C遺跡 佐々木剛一氏蔵

〔解説〕 図版第三は調査によつて採集した土器の文様を示すために時代順に並べたものである。1図は早期の貝殻文の破片のうち、口辺部のあるものだけである。文様のつけ方の違ひは器体が異

なることを示すものであつて、完全に残つていたら相当の数量になる。2図・3図は前期初めの縄文式土器の文様を三種類に分けて並べたものである。出土遺跡の報告を参照されたい。4図は前期の円筒式土器の中に、器口の開いた器形のもが現われて来るが、その破片である。5図は円筒上層式には縄を巻きつけたような粘土紐の隆起線文が口辺部につけられているが、その特徴のあるものを示した。6図は後期のすり消し縄文の土器であるが、下右隅は晩期福浦島式の破片である。7図は彌生式土器の破片で、彌生式土器の完形品はないので、破片だけで示した。

図版才四 石器類(1)

- 1 図 石鏃・石匕・石斧 ゴッソウ遺跡
- 2 図 石斧・石棒 ゴッソウ遺跡
- 3 図 石鏃・石匕 有家上のマツカ遺跡
- 4 図 石斧 上のマツカ遺跡
- 5 図 石斧 上のマツカ遺跡
- 6 図 石錘・石匕 大宮A遺跡
- 7 図 石鏃・石匕・石斧 大宮B遺跡
- 8 図 石鏃・石匕・石斧 館野遺跡

〔解説〕 図版第四は第三回調査で発見採集した石器だけを示したものである。8図を除いて他は、全部本文挿図と出土遺跡の報告の項で、夫々の名称を説明しているから、参照されたい。

図版才五 石器類(2)・その他

- 1 図 石鏃・石斧・有孔小円盤 高取遺跡
- 2 図 石皿・敲石 上のマツカ遺跡

- 3 図 石皿 館野遺跡
- 4 図 石皿 荒巻遺跡 全長五十五糎 佐々木鉄蔵氏蔵
- 5 図 石刀 藤好沢遺跡 佐々木剛一氏蔵
- 6 図 石棒 大谷地遺跡 全長五十五糎 佐々木六郎氏蔵
- 7 図 青龍刀形石器 榎割遺跡 平内小学校蔵
- 8 図 石槍 大平遺跡 玉沢重作氏蔵
- 9 図 石製模造品(剣) 袖山遺跡 玉沢重作氏蔵
- 10 図 アメリカ式石鏃 八木向山遺跡 玉沢重作氏蔵
- 11 図 環石 不明 佐々木剛一氏蔵
- 12 図 貝輪・骨針 有家上のマツカ遺跡 玉沢重作氏蔵

〔解説〕 図版第五は図版第三に示し得なかつた調査採集石器の他に

町内に出土している特徴ある石器と骨器、貝輪を示したものである。2図の石皿と敲石は木の実や根などを調理して粉を作る道具である。3図の石皿は裏面にきり込まれた穴があいている。火鑽白(ひきりうす)として用いられたとも考えられる。この種のものは凹石(くぼみいし)と呼ばれているが、これは石皿が凹石に利用されている例である。5・6図の棒状の石器は石棒と云われるが、その形によつて石刀・石剣など ばれている。7図はその中でも青龍刀に類似しているので青龍刀形石器と呼ばれているが、東北、北海道方面に存在する特長ある石器で、岩手県に現在四点ある一つである。9図の石製模造品と云われるものは、滑石時には粘板岩などで作られ、武器や農具・什器類などの形を模造したもので、中期古墳の副葬品として発見される外、祭祀遺跡に発見されている。祭祀遺跡の場合はその後も用いられたらしい。

本出土品はその場所から考えて、祭祀遺跡と見た方が良いかも知れない。剣を模造したものである。10図のアメリカ式石鏃はアメリカの原住民の遺跡から発見される石鏃に似ているので、この名がある。東北地方で彌生式土器に伴出する例が多いので、本石鏃の出土地も彌生文化に関係があると考えられる。11図の環石は南洋の原住民の土俗に、これを棍棒の先に通して固定し、武器として用いる例がある。従つて棍棒頭石器とも呼ばれている。12図の貝輪と骨針は貝塚から発見される遺物である。種市町には貝塚の存在が報告されているが、骨角器や貝製品の遺物の保存されているものは少ない。現在本品と八木駅前、ホツクリ出土のものを玉沢氏が保管しているだけである。気仙地方・宮古地方や八戸地方には数多くの貝塚とその出土品があるから、種市地方にも、もつと発見されても良いと思うが余りないのが現状である。貝輪は腕輪にした装身具である。骨針は両端が欠失している。

図版才六 土偶・その他

- 1 図 土偶(晩期末) 戸類家遺跡 慶応大学蔵
- 2 図 土偶の顔(後期) 伝吉遺跡 角浜中学校蔵
- 3 図 土偶の体部(後期) 八木向山遺跡 玉沢重作氏蔵
- 4 図 土偶の体部(中期) 伝吉遺跡 角浜中学校蔵
- 5 図 土偶の体部(晩期) たけの子遺跡 佐々木剛一氏蔵
- 6 図 佩飾石器 たけの子遺跡 佐々木剛一氏蔵
- 7 図 釣鐘形土製品 西館(岡谷)遺跡 高さ五糎 玉沢重作氏蔵
- 8 図 土印 西館(岡谷)遺跡 全長三・七糎 玉沢重作氏蔵

9 図 土版 西館(岡谷)遺跡 全長六・八釐 玉沢重作氏蔵

10 図 土製の犬 小子内遺跡出土 全長五・五釐 川崎浩吉氏蔵

〔解説〕 図版第六は土偶その他異形の遺物を示したものである。土偶は埴輪と間違えて呼ばれるが、縄文時代の土の人形は土偶といわれる。埴輪は古墳時代のものである。土偶の表現も時代によつて違つた特徴をもつているが、種市町には中期から晩期までのものが発見されていて、その種類は多い方である。土偶の用途は明らかでないが、原始呪術と関係があつて、収穫の豊かなことを祈つたり、病の回復、身の安全を祈願するお守りのような役目も考えられる。土偶は女性を表現しているもので、乳部を表現しているのに特徴がある。6 図は一応佩飾石器と呼んだが、はつきりした名称がない。パツクルのように用いられたものでないかと思われる孔が二つ開けてあるので、こう呼んで見た。縄文晩期のものである。7 図は紐を通す孔が上部にあるから釣り下げたもので、首飾か耳飾りでないかと考えている。縄文後期の遺跡からしばしば発見されている。8 図の土印は形からこう呼ばれたものであるが、これも垂飾品の一種でないかと考えている。9 図土版は一応こう呼んだが、普通土版と云われているものと違つている。表裏両面に縦に背骨のような稜があり、胴部の真中に下から貫いて串のようなものを差し通した孔が開いている。土偶の変形とも考えられる。土版は一般に護符のようなものでなかつたかと考える。なお、⑦⑧⑨の出土地は玉沢氏は西山岡谷のと称しているが、三十六年度の遺跡調査では西館遺跡としていたので、それに従うことにした。10 図は土製の犬で良く出来ている。犬の土製品は縄文

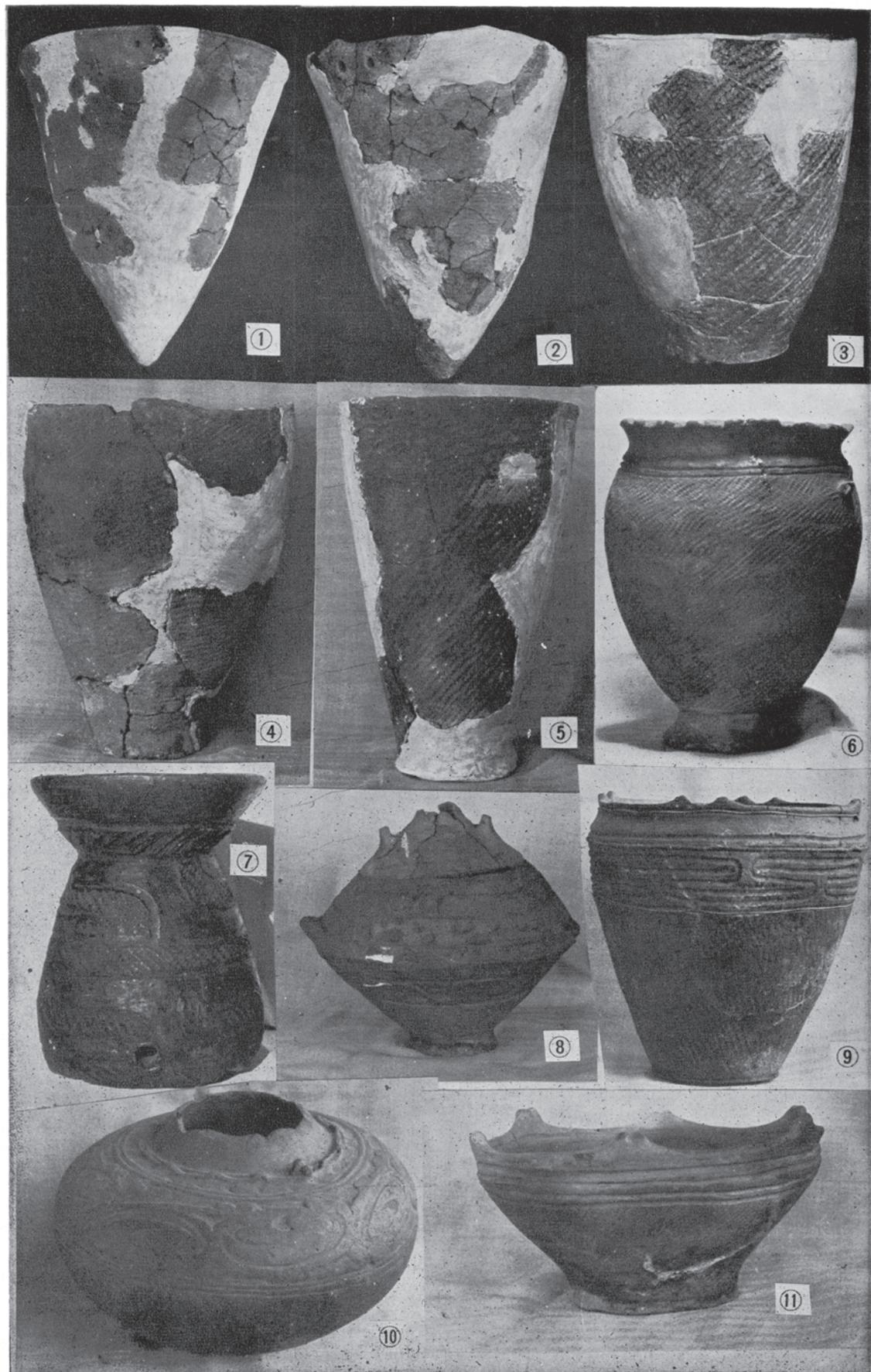
時代からあるが、この種の犬の土製品は土師器の頃まで下るのではないかと考えられる。東北地方に後にまで存在するのは狩猟生活と関係がある遺物と考える。この種の犬は県内に数例ある。

図版才七 発掘調査状況

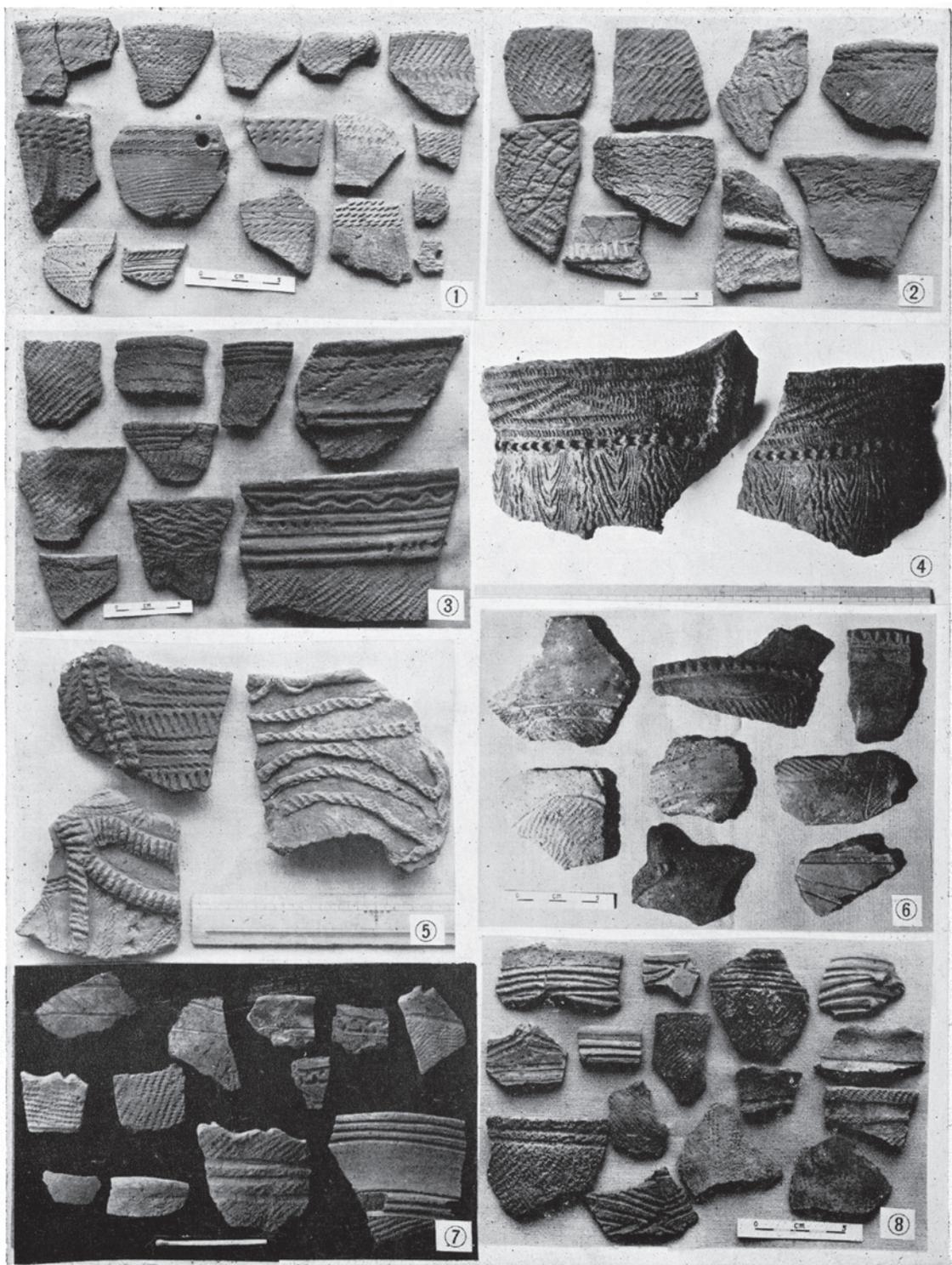
- 1 図 ゴッソウ遺跡の遠景
- 2 図 有家上のマツカ遺跡の全景
- 3 図 ゴッソウ遺跡土器出土状況(1)
- 4 図 ゴッソウ遺跡土器出土状況(2)
- 5 図 梅内遺跡土師器出土状況
- 6 図 高取遺跡完形浅鉢出土状況
- 7 図 高取遺跡炉址の状況
- 8 図 城内館の全景

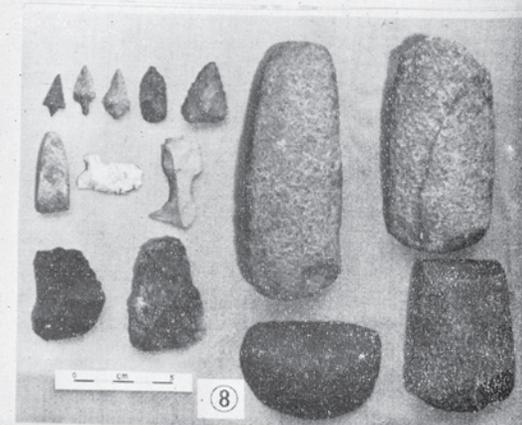
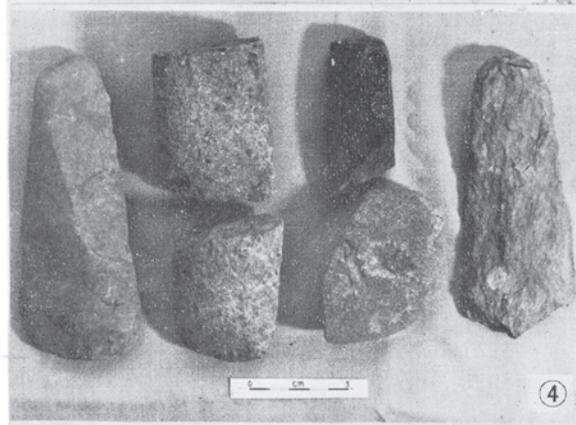
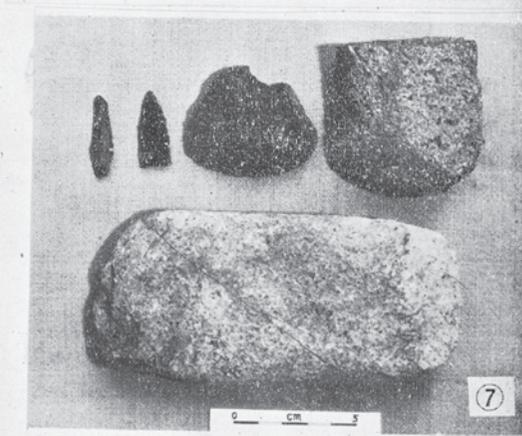
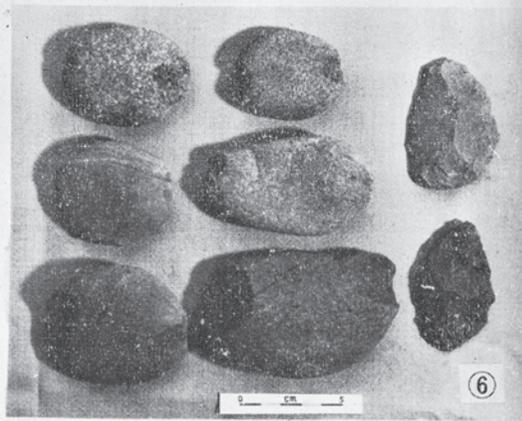
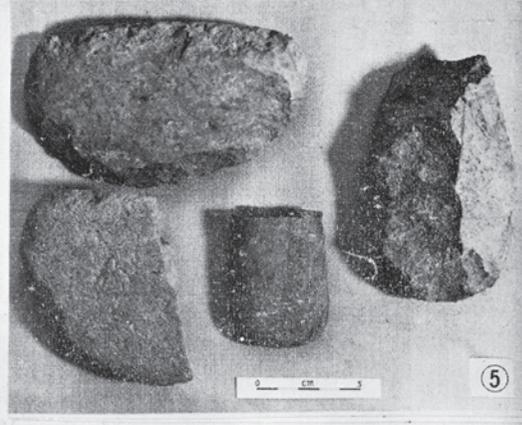
〔解説〕 後篇の第三回調査中に撮影した遺跡の状況や、発掘して遺物の出土した状況を御覧いただくために、数枚の写真を示すことにしたものである。8 図の城内館は長岡善一郎氏に依頼して撮影したものである。

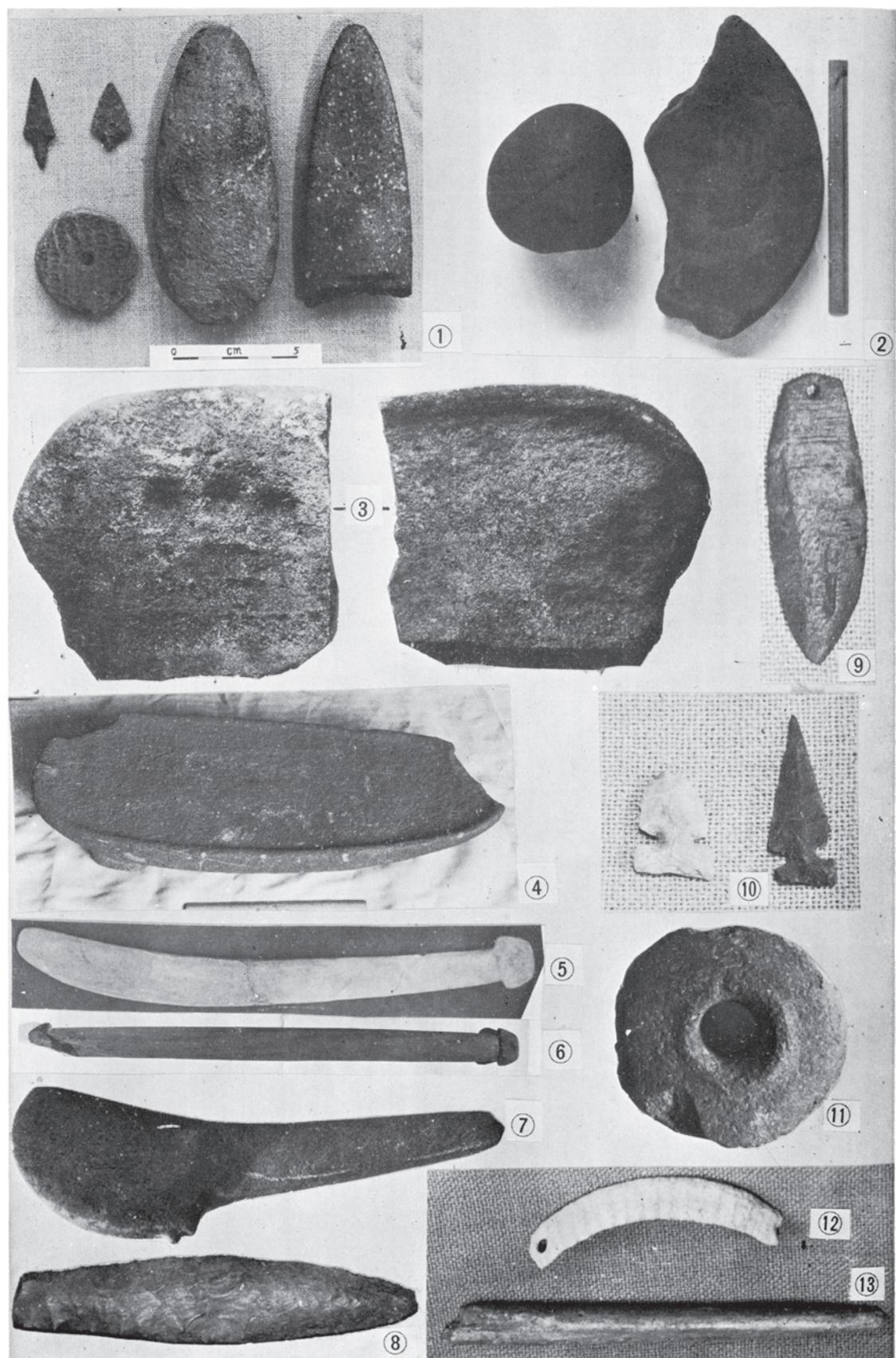
図 版

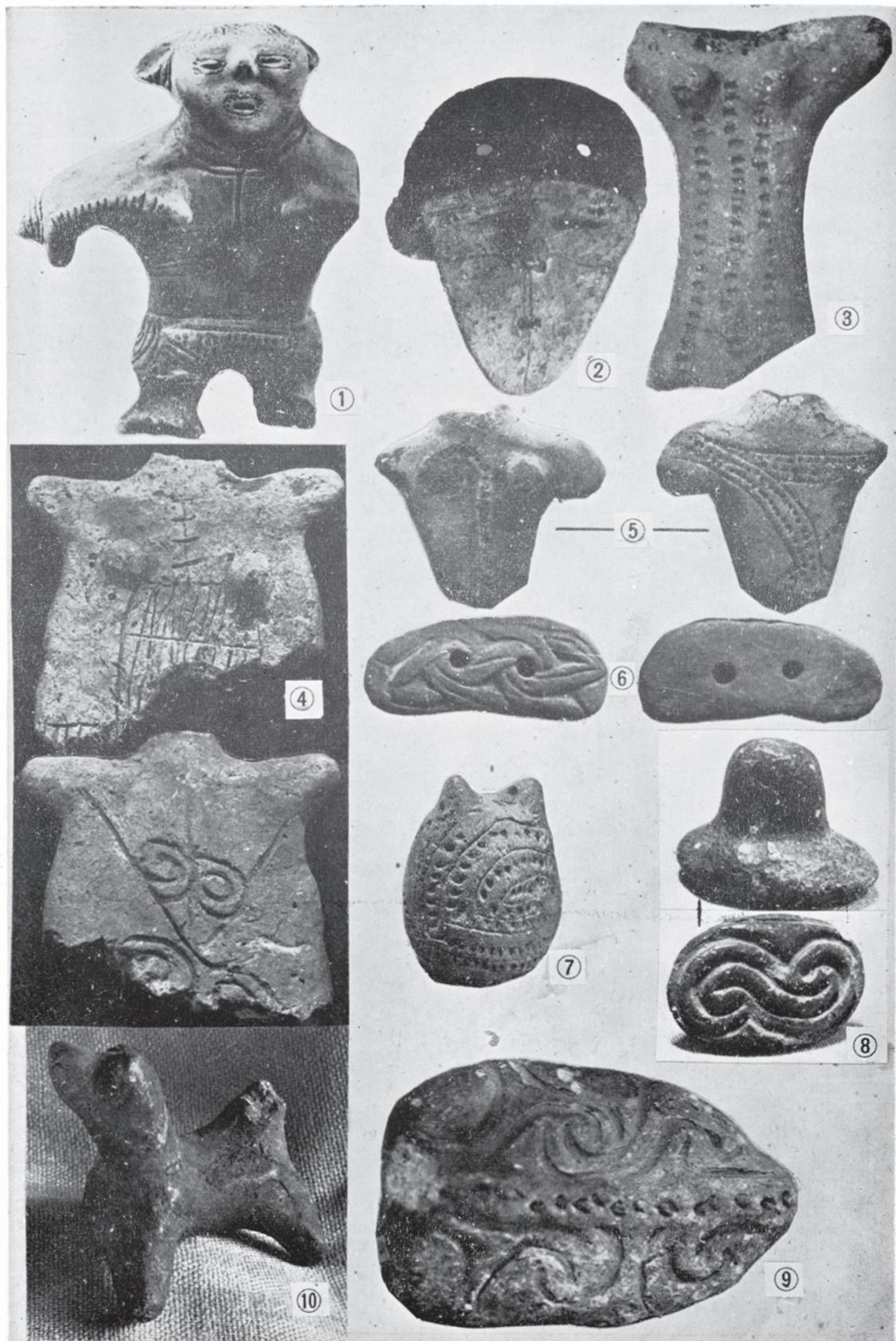


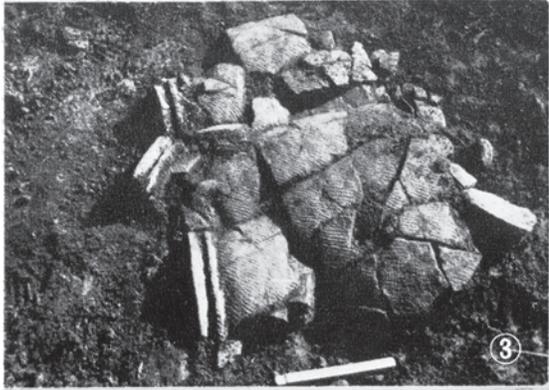
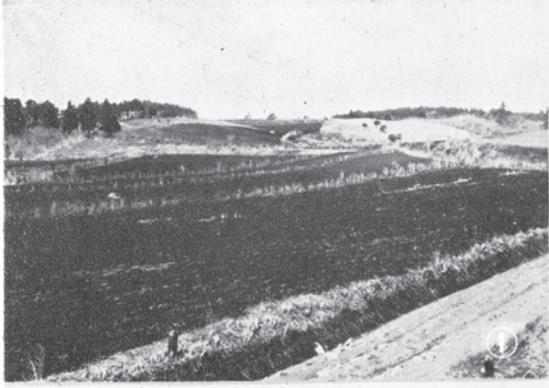












挿 図 ・ 表 目 次

才1 図	ゴッソウ遺跡出土 石器類(1) 石鏃・石ヒ・石斧・板状石器	43
才2 図	ゴッソウ遺跡出土 石器類(2) 打製石斧・横刃形石斧・石棒	45
才3 図	上のマツカ遺跡出土 石器類(1) 石鏃・石ヒ	47
才4 図	上のマツカ遺跡出土 石器類(2) 石斧・横刃形石斧・板状石器	48
才5 図	大宮A遺跡出土 石器類(1) 石鏃・石ヒ	49
才6 図	大宮B遺跡出土 石器類(2) 石鏃・石ヒ・石斧	52
才7 図	にしゃくどう遺跡出土 器台	55
才8 図	梅内遺跡出土 土師器 甕・甌・壺・皿	57
才9 図	種市町内遺跡分布図	67
才1 表	縄文時代の時期区分を町内遺跡名	16
才2 表	種市町内石器時代遺物出土地名表(昭和十一年)	38
才3 表	種市町内石器時代遺物出土地名表(昭和二十八年)	38
才4 表	種市町内遺跡地名表(昭和三十八年)	66

前
篇

種
市
の
歴
史

第一章 序論（歴史理解のために）

一 種市町の歴史の書き方

種市の歴史について述べる前に、歴史とは何であるか、昔の歴史と今の歴史がどうなっているかということから述べたいと思う。

歴史は人間と共に始まり、人間のみが歴史をもつものである。人間の存在が歴史のはじまる最初である。このことはちよつと奇異に感じられるが、重要なことである。勿論、人間がこの地上に出現する以前から時間の経過はあり、自然界の推移変遷はあつた。人間の出現した地球にも、地球の歴史といわれる自然の経過はあつたし、地球の所在する宇宙の歴史というものも考えられる。しかし、それを歴史として考えるようになったのは人間であり、人間によつて歴史があとづけられるのである。時の経過だけでは歴史ではなく、それが経過として人間に考えられて、はじめて歴史となるのである。

従つて、歴史をもつことは人間の特権である。人間が人間として自覚するとき、歴史を考えるのである。国家も国家としての自覚をもつたとき、国家の歴史を考えるのである。村が村としての発展を考え、飛躍しようとするとき、村の歴史を考えるのである。そのため、歴史を

学ぶことは「温古知新」の学であると云われる。歴史を考えることは、過去に沈潜することではなく、その過去を通して新しい自分を見出すことである。

いま種市町の歴史を考えると、現在の種市町がどうなつて、どうしようとしているかということが、種市町の歴史の出発点でなければならぬと思う。その点において、私の研究は十分でないし、勿論その意図での研究をしたものでもない。その意味で考えると、種市町の歴史を述べるには、根本的な欠陥がある。だが、私は日本歴史を研究する者として、日本歴史全体の発展の上から、種市町がどう云う状態にあつたか、どうなければならぬいかと云うことには無関心ではない。その点、現状についての調査はしていないが、原始時代から中世頃までのことについて、断片的ではあるが調査もして、私なりの考え方もつている。

私が種市町の歴史を述べるとすれば、そう云う意味で、日本歴史全体の発展の上から、種市町がどうであつたかと云うこと以外述べられない。しかし、種市町の歴史を述べる場合、これでは不十分であることはいりまでもない。ここでは、種市町の原始時代の諸遺跡を調査した機会に、それがどういふものなのか、日本歴史全体との関

連において明らかにしようと思つて、種市町の歴史の中世までのところについて概観しようとするものである。

一 今の歴史と昔の歴史

「今の歴史は昔の歴史とちがつている」と、いわれる。むかし教えられた歴史の内容が教えられずに、今の教育では別のことが教えられている。そのことが、今の子どもは歴史を知らないということにもなる。その根本であり、本質的な違いは、天皇制国家を立前とした天皇中心の歴史であつた過去の歴史とそうでなくなつたことにあつた。その違いは歴史の書きはじめに最もよくあらわれている。

昔の日本歴史は、イザナギ、イザナミ二神による大八洲国（オオヤシマクニ）といわれる日本国土の生成があり、それにつづいてその国を統治される神として天照大神の出現となる。天照大神の神徳が述べられるが、大神の住んでいるところは日本国土でなく、高天原であつた。統治者として生れた天照大神がその使命を実現するため、御孫ニギノミコトを日本国土につかわすことになり、日向（今の宮崎県）高千穂峰への降臨となつた。しかし、日向の地は日本国土の中心地でないため、日向の三代目に神武天皇が出現して、日本の中心地大和を平定して、そこに橿原宮をつくり、即位されて人皇第一代の天皇となられ、日本国家の基礎をきずかれたのである。

有形無形の威圧を受けたことが、日本の独立を確保するために、国家体制の整備を必要とした。その際天皇中心の統一国家の体制をとつたのであるが、このような天皇制国家が形成されなければならぬ所以がどこに由来するかを明確にすることは、新しい国家を支える柱として、また国民教化の大本として重要なことが感ぜられ、国史の編纂が企てられたのである。その結果として、できたのが古事記であり、日本書紀であつた。

日本には、記紀以前から自分たちの祖先のことを語りつぎ聞きついでできたものがあつたことは古事記にも述べられているし、聖徳太子が摂政の時、「天皇記及国記、臣連伴造国造百八十部并公民等の本記を録したまう」とあることによつて知られる。その書き並べられた天皇記、国記、諸氏族の本記などから推定すると、天皇記が最初にはなつているが、諸氏族のものと一緒に集められたもので、諸系譜のようなものの集積ではないかと考えられる。それに対して新しく編纂された日本書紀は、天皇即国家の歴史となつている。天皇の歴史を述べることによつて国家全体の歴史がつくされる体裁をとつているのは、天皇制国家体制に則する歴史であることを意味するのである。

聖徳太子の頃は、諸豪族が中央また地方に夫々土地人民を支配して諸王として勢力をもつていた。その中で天皇は恐らく大王として諸王の中で最も強大な支配力をも

その後、神武天皇の子孫の歴代天皇が大和を中心に、次第にその勢力を伸張されて日本国土を統一し支配するようになつた経過が述べられていた。

これで見ると、日本の歴史のはじめに、日本の国土と国土の統治者が物語られている。しかし、人類の歩んできた歴史をふりかえつて見るとき、人間が社会生活を営む場合、国家という政治社会をつくるようになったのは、相当進歩した段階であつて、人間がこの地上に現われてから、非常に長い年を経過してからである。如何なる民族でも、国家の成立するまでの経過がある。それにも拘わらず、国家の成立がはじめて書かれているのはどうしてであろうか考えなければならぬ。

むかし、国が自国の歴史を書きしるすとき、その国家の起源から書きはじめるのは普通のことであつた。日本の場合でも、最初に出きた古事記、日本書紀が、日本国家の歴史を書きしるしたものである点で、国家の起源から書きはじめられていることは当然であつた。しかし、その内容が前述のようなものであつたのにはその理由がある。

即ち、今から千三百年程前に行なわれた大化の改新は、日本歴史の発展にとつて一大事件で、これによつて天皇を中心とする中央集権の国家体制が確立されることになつた。その原因として国内、国外の事情があつたが、殊に対外的には唐という大国が支那大陸に成立して、その

つていたと考えらる。そのことが歴史の編纂を行うときに、前に述べた諸系譜のような体裁をとつたと考えられる。それが大化改新による天皇制国家体制の成立は、それに応ずる歴史の編纂となつたのが日本書紀で、天皇の権威とそれが国家統治を行うに至る由来を述べることになつたので、諸豪族の存在は天皇の権威に服することによつて、その存在を認められる存在になつた。

このような歴史が、明治以後の日本の天皇制国家の歴史教育において重視され、日本書紀が神典のように重要視されたのである。しかし、このような歴史の叙述は、大化改新以後に出来上つたものである。したがつて、歴史が述べられている順序から云えば、神話があり、それに基づいて国家がつくられてきているが、それが書かれるようになった経過から考えると、天皇制国家が成立して後に、その由来を説明するために神話が前に述べた体裁にまとめられたのであつて、出来た順序は逆である。

従つて、このような国家の起源を書いた歴史をそのままの史実と考えるとき、色々の問題や疑問が出されるのである。事実、日本人が文字を用いたのは古くても千五六百年前で、大化の改新の時から云えば二三百年前にすぎない。しかも支配者階級の人々にもある程度文字がつかわれ出したのは、改新の五六十年前の聖徳太子の頃か、むしろかすぎない。それが当時、千二百年も前の国家の成立の事情を記する場合どのような史料があつたか、昔

の出来事は語り継ぎ云いついで記憶して来たと云つても二三百年もたてば曖昧となり、わからなくなつてしまつてゐる。殊に年代などは不明な点が多かつた。しかし、国家の起源を書く場合、その建国の年をきめる必要に迫まられて、推測してきめたのが神武紀元の年である。その場合、聖徳と仰がれた上宮太子の摂政の期間に辛酉(カノトリ)という中国思想で革命に当る年まわりがあつた時から千二百六拾年さかのぼつた年を建国という大革命に当る年であろうと推定して、神武天皇即位元年の年としたことは間違いないと考えられる。

このような国家起源の歴史は、日本書紀の編纂された当時としては充分意味のあることであり、これに代るものはなかつたと考えられるが、今日諸学問が進歩発達した時において、それをそのまま史実として教えることが否定されて来たことは当然である。そして日本国家が成立するまでの、日本民族の歴史がどうあつて、どのような時期に日本国家が成立して、発展して来たものであるかということ、日本書紀や古事記の記述だけでなく、過去に実際に生活した人々の残したあとや物によつて、また日本と古くから交渉をもつていて、記録を残している中国や朝鮮の歴史などを参考にして述べているのが今日の歴史である。

そのようにして述べられる今日の歴史はどうであるかについては、第二章以下で述べる。ただ、神話などによつて語つてゐる。太平洋側の経営が積極的に進められたのは、奈良時代になつてからである。西暦七一二年に出羽国が設置されたのに、西暦七一八年に石城・石背(岩代)(いずれも今の福島県)両国が設置されている。七二四年に宮城県に多賀城が築かれ、鎮守府とされている。これによつて宮城県が、大和国家に服することになつた。

しかし、更にその北の岩手県の地域の経略は容易でなく、しばしば軍を出したが敗れ、その成果を挙げ得なかつた。平安時代になつて桓武天皇の代、坂上田村麻呂によつて戦果が挙げられ、胆沢城(八〇二)、志波城(八〇三)が築かれることになり、北上川流域地帯がその支配下に服することになつた。未だ県北の馬淵川流域地帯にはその勢力が及ばなかつた。それが嵯峨天皇の代になつて、文屋綿麻呂が爾薩体の蝦夷を討平し、ここに蝦夷は全く終熄したとあるから、東北地方の経営は一応完了したと考えられる。それが西暦八一一年で、今から千百五拾二年前のことである。

四 二戸の天台寺

この平安時代になつてから県北地方が日本国家の中に入つたといふことで、問題になるのは、二戸郡浄法寺町の天台寺である。天台寺が奈良時代の高僧行基菩薩によつて開創されたといふ寺伝があることから、この地方が奈良時代に日本国家の勢力下に入つていたのではないか

る歴史の叙述は否定されたが、神話は神話として、古い日本人がどうしてこういう物語を作つたかといふことは、日本人の思想、信仰、生活、風習などに関係して、興味ある研究課題として、重視されることには変りがない。次に、今少し古しの歴史に基づいて日本の発展と東北のことについて述べて見よう。

三 大和国家の発展と東北の経略

神武天皇によつて建国された大和国家が、大八洲といわれた本州、四国、九州の全体の地域を支配して、日本国家といわれる実質をととのえるに至る過程は簡単ではなかつた。大和国(今の奈良県)を根拠地として、崇神天皇の代に四道將軍の派遣があつて、東は尾張、若狭(熱田神宮・氣比神宮)、西は丹波、吉備までがその範囲となり、景行天皇の代に日本武尊の征討によつて、九州から関東地方までがその支配地となつた。その後、朝鮮半島への交渉が盛んとなり、東国地方殊に東北地方は疎外され、その経営は停滞することになつて、大化改新の頃までに至つた。

大化改新による国家体制の整備に伴い、従来疎外されていた東北経営がおし進められることになつた。その最初が阿倍比羅夫による秋田・能代の討平であり、その後更に津軽方面にまで、その勢力が及ぶようになつた。これは東北経営が先ず日本海方面から進められたことを物

と考えられることである。なぜならば、奈良、平安時代の日本国家の東北地方経営には武力の征討と仏教の教化が併行して行なわれており、仏寺の建立にはその前提に国家の支配権力の確立があつたからである。そうすると、岩手県の北上川流域地帯が日本国家の支配に服しない以前に、県北の馬淵川流域が日本国家の勢力が及んでいたことになる。若しその可能性を信ずるとすれば、県北方面には、既に日本国家の勢力の及んでいた秋田県方面から、安比川に沿つてその勢力が及んで来たとしか考えられない。この点から考えると、天台寺の文化は裏日本の文化であると云う主張がなされ、県北一帯は県南より早く日本国家の勢力に入つたことになる。

しかし、天台寺が奈良時代の行基によつて開創されたといふ寺伝は、根拠のあるものでなく信ずるに足りない。勿論、行基がこの地に来たなどと云うことは到底あり得ないし、また奈良時代に作られたと考えるに足る手がかりとなるものは何もない。それに反して、平安時代になつてこの地方が日本国家の支配に服した頃、創建されたものではないかと考えるとき、現在寺に本尊として伝えている十一面正観音ほかの諸仏像がある。これらの仏像は鉈彫といわれる丸ノミを用いて作られた仏像で、平安時代のはじめの頃の作と考えられている。この様式の仏像は平安時代の開拓地である北上川流域地帯の各地に多く存在していて、それと関係ある仏像ではないかと推定

される。かく考えると、日本の歴史に記述されている通り、東北の文化は北上川流域を溯つて来た文化であつて、平安時代になつて日本国家に入つたものと考える方が正しいと考える。かくてその際、天台寺は東北地方の教化の中心として建立されたもので、東北地方の人々の教化に重大な役割を果すことになつて、多くの人々の尊崇を受けたのである。

五 蝦夷について

大和国家が日本を統一する過程において、東国から東北地方にかけて住んでいて、大和国家に敵対し、征服されて行つたのは蝦夷と書かれている人種である。この蝦夷は平安時代のはじめまで岩手県に住んでいたが、この人種はどう云う人種で、どう云う文化をもつていたものなのであろうか。この蝦夷は当時エミシと呼ばれたものであると思ひが、この蝦夷の文字は江戸時代以後北海道に住んでいた原住民アイヌ人に対しても用いられた。その場合、エゾと呼んでいる。この蝦夷という同一文字を当てて書かれた、むかしのエミシと後のアイヌ人のエゾと同一のものであるか、違うものであるのか。それと関連してエミシと対立した日本人とはどう云う人種なのか。興味ある問題であるので、一言触れて置きたいと思ふ。

日本書紀を見ると、蝦夷について次のように書いてあ

る。

「其の東夷の識性暴強にして、凌犯を宗と為す。村に長なく、邑に首なし、おのおのの界を貪りてならびに相盗略す。また山に邪神あり、郊に姦鬼あり、街を遮りて、徑にふさがり、多くの人を苦しましむ。その東夷の中に、蝦夷是れ尤も強し。男女交り居て、父子の別なし。冬は則ち穴にね、夏は則ち燻にすむ。毛を衣、血を飲みて、昆弟相疑い、山に登ること飛禽の如く、草を行くこと走獸のごとし。恩をうけては則ち忘れ、怨をみては必ず報ゆ。是を以て箭を頭髻におさめ、刀を衣の中にはけり。あるいは党類を聚めて辺界を犯し、あるいは農桑を伺ひ以つて人民を略す。撃てば則ち草に隠れ、追えば則ち山に入る。故に往古より以来王化に染がわらず。」

エミシの人種、民族、文化についてのこのような記事は、奈良、平安時代になつてからの記事でも大差はない。例えば、平安時代の桓武天皇の頃、蝦夷を王化にしたがつた内地に移住しめても「夷俘（蝦夷のとらえられた囚人）等狼性いまだ改らず、野心（粗野な心性）馴らし難し、あるいは百姓を凌し、婦女を奸略す。あるいは牛馬を掠め取り、意にまかせて乗用す」と、云われる状態であつた。このような記事から推定されるエミシは、日本人とは違う異人種、異文化の化外の民であつて、アイヌ人と関係の深い人種と考えられる点が多い。果してそうであろうか。

日本書紀が編纂された頃、大和国家の日本人が接したエミシは東国地方殊に東北地方に住んでいて、大和朝廷に敵対していた。しかし、エミシはもともと東国地方だけでなく、大和国家がその基礎を置いた奈良県にも多く住んでいたことは、神武天皇の次の歌によつても知られる。「エミシヲ、ヒタリモモナヒト、ヒトハイヘドモ、タムカヒモセズ」。神武天皇はこれらのエミシ等を討平して後はじめて、大和国家の基を定めることが出来たのである。このように考えてくると、エミシはもともとこの日本国土に住んでいた原住民であつて、大和朝廷の日本人はそれを征服して、国を建てたことになる。そうすると、この大和朝廷を作つた日本人とはどういふ人種なのであるのか。原住民のエミシとはどういふ関係にある人種であるのか反問されてくる。

大和朝廷の日本人が、神話が伝えるように天から降りて来た民族などは考えられないとすれば、この地球上のどこかにその原住地を求めなければならぬ。日本書紀によれば、日向（今の宮崎県）から兵を起しているから、九州地方に住んでいた民族なのであろうか。しかし、同じ日本書紀では、九州地方には熊襲という異人種が住んで勢力をもつて大和朝廷に敵対していたが、大和朝廷に次第に支配されて行つたことになつてゐる。九州地方でも、この熊襲とは別に宮崎県地方だけに住んでいたと考

えれば、余り日陰の存在でしかなく、熊襲に追い出される。

たとしか考えられない。それなれば、大和朝廷の日本人は外国から渡来してきて、一時的にそこに住んでいただけで、それが去つて後に熊襲が再びそこを征服支配して

いたと考えられるであらうか。そうした場合、原住地が外国で、宮崎県に一時根拠を置くことになつた事情にある民族を現在さまざまの学問的立場から探しても、探し出すことは出来ないし、またそれに該当するような国外の民族の存在の可能性は全くないと云つてよい。

このように考えてくると、大和国家をつくつた日本人も、何も特別の存在でなく、蝦夷や熊襲と同様な原住民で、古くから日本国土に住んでいた人種であると考えるのが一番妥当と思はれる。そうした場合、日本国土には西の方から熊襲、日本人、蝦夷という三種の原住民が住んでいたというようものでなく、この東北から西南に細長く弓なりに伸びている日本列島では、気候、風土の若干の相異もあつて、各地域の地域性は若干あつたであろうが、人種を異にするような対立があつたのではなく、日本民族として住みついていたものであろう。その日本民族の中から、今から千七八百年前に大和地方に優れた人物があらわれて大和国家のもとになつた国をつくり上げた。その国には代々優れた人物が出て、その頃他の地方に出来た国々を次第に支配して行つて強大な国を作り上げて行つた。それが日本国内において、東に西に発展して行く過程において、その敵対する勢力を東では蝦夷

と呼び、西では熊襲と呼んだものであろう。

この大和を中心とした国家が東は関東地方から西は九州地方までを統一して日本国家をつくり上げる頃には、朝鮮半島にまで勢力を伸張することになった。朝鮮半島は先進国中国の文化の攝取地として、日本国家がその軍事的にも文化的にも重大な関心のあつた地域であつた。

この半島経営へ大和国家の勢力が傾倒された結果、東北地方は疎外されることになり、長く日本国外として特別視することになったであろう。それに加えて、当時中国から伝わってきた中華思想（自分たちの所が最も開け進歩していて、他の地方は野蛮未開なところ人間も劣つていっているという考え）が、東北の地を益々異狄野蠻視したものと考える。したがつて、エミシも日本人と本来対立する民族として存在したものでなく、日本の国土に住む同じ原住民であつた。それが大和国家が形成されると共に、勢力の及ばない土地に住む人々を対立する民族として意識し、野蠻視するようになったと考えるのが妥当である。

しかし、未だ一つの問題として残るのは、岩手県から北にかけて特に多いアイヌ語に因んだ地名の存在である。これは東夷全部といわなくとも、岩手県及びその北部にはアイヌ人が多く住んでいて、それが蝦夷と呼ばれたのではないかと考えられることである。この考え方について、東北地方にアイヌ人と同一系統の人種が住んでいて、それが原住民であつたという考え方は、前に述べた論拠

その文化の内容については後に述べるが、相当高度な内容をもつていたことが今日明らかにされている。それだからこそ、坂上田村麻呂のような優れた武將によつてのみ、その征服が可能であつたのである。

その大和国家の国土統一も平安時代初め東北地方の平定によつて一段落し、この新支配地の経営に力が注がれた。そのため蝦夷と云われた人々を内地に移住したり、南方の人を東北に移住せしめたりして原住民との融和を計ると共に、仏教を布教して人心の教化に努めた。また東北地方に黄金の産出したことが、帰化人などを移住せしめて資源の開発に努めることになり、北方的な原住民に新しい要素を注入することになった。それに対して津軽海峡を隔てた北海道は別の国として日本から判つきり切り離なされ、特殊視されることになった。殊に北方で気候の寒冷なことは、米食を主とする日本人にとつて不適な土地として顧みられなくなつた。

勿論、北海道と本州との交渉が全くなかつたとは云われないにしても、原始時代の狩猟採拾の生活をしていた時代と農耕栽培の生活を営むようになった時代の両者の関係は著しく変化し、昔のような類似はもたなくなつたと考えられる。云いかえれば、平安時代以降の両者の生活の差異は著しくなり、両者の交渉は部分的に偶発的にあつたにしろ、全体的に見れば隔絶して行つたと考えられる。即ち、北海道は孤立した島として、そこに住む原

と矛盾するものではない。なんとすれば、原始時代アイヌ人と云い日本人といつても、同じ日本国土の原住民で、そう並べて区別される存在ではなかつた。日本は小島でありながらも、東北から西南に細長くのびていて、地形的にもいくつかに区切られ、気候、風土の差異もあることは、同じ日本国土に住む日本の原住民といつても、全く同一の文化内容をもつていたわけではなく、東北地方と九州地方では相当の差異があつた。東北地方北部が北海道の南部と類似し、東北地方南部が関東地方と類似していて、殆んどその差異を認め難い文化内容を示していることは、判つきりした国境のない形で相互に交渉し合つた結果当然のことであつた。その点東北北部が北海道と共通性をもつたことは疑いないことであるが、それが日本国土の人種や文化を本質的に違つていたかと云うことは別問題である。

この東北地方を異人種、異文化と対立して考えたのは、大和国家の成立とその支配地の確定が、もたらした結果であつて、本来の相異ではない。殊に大和国家の成立という統一権力の成立は、それに隣接した地域にもそれぞれ地方権力の成立をうながし、地域的な小国家を形成させた。それが恐らく「胆沢の蝦夷」とか「爾薩体の蝦夷」と呼ばれたものであろう。従つて、これらは南方から侵入して来る大和国家の軍事力に対抗して戦える組織をもつていたもので、決して原始無智な野蠻人ではなかつた。

住民と本州に住む日本人との生活内容も異なり、人種的な交流も殆んど行なわれないう状態に置かれた時代がつづくことになった。このことが、本来相似た人種としてあつた東北地方の人種と次第に別な人種となるような形で、人種が形成されて行くことになり、それがアイヌと呼ばれる人種となつたと考えたい。即ち、日本の原住民は日本本土では日本人になつたし、北海道ではアイヌ人となつたと考えるのである。勿論、原日本人が今日の日本人になるまでには、生活環境の変化もあろうが、人種的には帰化人の朝鮮系の血も相当入つている。それに対して、アイヌ人は生活の変化も比較的少なく、混血的なものも少なかつた。このことが、江戸時代以後の日本人の眼に、異人種、異文化として映ずる程の差異をもたらしたが、このような差異が本土に住む人と北海道に住む人との間にはじめからあつたものではなく、平安時代以後の歴史発展の過程において形成されて来たものと考えられるのである。

従つて、岩手県の人が自分の祖先はアイヌ人だと考えることも、日本人だと考えることも何れも正しいと思う。しかし、日本本土に住んでいた限り、日本人であり、その地にある原始時代の文化は日本人の祖先の文化であつて、アイヌ人の文化ではない。日本本土に成長した文化と全く異質な近世のアイヌ人の文化とそれに関連するもの以外、アイヌ文化として取り出せる文化は原始時代の

日本文化にはないといえる。

以上述べて来たが結論は、エミシを日本人と無関係なアイヌと云い得る材料がないということである。

なお参考のために、種市の地名でアイヌ語で解釈されるものについて、長岡善一郎氏に御寄稿を願つたのは次の如くである。

「種差(タンネ・エサウシ *tanne-esausi*) は長い岬で、山が川岸(海岸)まで出ているところの意味であることは知里真志保・山田秀三共著「東北地方のアイヌ語地名解」に記載されているところである。知里真志保によれば種市(タンネ・エツ *tanne-etsu*) は長い岬・鼻と解される。町内には内(ナイ *nai*) 沢・小川の意味のつく地名として平内(ヒラナイ)、荒津内(アラシナイ)、小子内(オコナイ)、原子内(ハラシナイ) 城内(シヨ *shio* オナイ) があり、尻(シリ) 陸地の意味のつ

第二章 原始時代の種市

一 人間と道具

人間が他の動物とちがつて優れているのは、火を用い、道具を使い、言葉が話すことが出来ることである。人間が四つ足の状態から解放されて、手を自由につかうことが出来たことは、その生活の必要からさまざま道具を

く地名には川尻(カワシリ)、沢尻(サワシリ) があり、平(タイ) 森の意味のつく地名には浜平、上平がある。その外マツカは奥、山手の意味であり、宿戸(シユクノヘ) はうぐいの川の意である。高家(コゲ)、有家(ウゲ)、戸類家(ヘルケ)、粒来(ツブライ) 等もアイヌ的地名である。

これ等アイヌ的地名を包含することは、この地帯に嘗て住古アイヌの居住せしことは否定し得べくもない。金田一京助の「北奥アイヌ地名考」によつて既に北海道南部・本州北部にこの種地名が濃く残存していることが報告され、近くは元文、宝暦、天明時の記録によつて津軽北辺海浜に当時居住せしアイヌの事例、喜田貞吉による本州におけるアイヌの終末の研究(東北文化研究) もあるも、その居住せし盛時の年代について明確な研究については未だ接していない。」

つくり、それを使用することになつた。そのため人間の生活してきた跡には、さまざまな文化遺産を残し、それを通して人間の文化の発展をあと付けることが出来る。人間は文明を作り出したのであり、これは人間のみがなし得たことであつた。

今日の目覚ましい文明の発達、めまぐるしい進歩に対し

て、過去の文明の進歩は遅々たるものであつた。しかし今日の文明の進歩も、そのような過去をふまえて、今日の状態に至つたものである。次に過去の進歩のあとをふりかえつて見ることにしよう。しかし、その過去の状態を研究する場合、我々は人間の残した文化遺産が腐蝕、燬滅していかないものだけで推測するのであつて、その当時の文化の全部ではないことを一応念頭に置かねばならない。

人間はそのはじめ、生活の必要のためにさまざま道具を作つたが、自然物のそのあるままの性質や形を利用して、道具としたかも知れないが、それが自然物の状態と変らない場合これを人間の作つた道具とは云わない。人間がそれを作つた道具と呼ぶ場合は、その性質を利用して、ある目的にかなうように加工したものを道具と呼んでいる。その場合、人間は自然物の性質を利用し、その形を変えるだけで道具を作つた。即ち石の堅さを利用して、それに打裂を加えて刃物としたり、骨や角の堅さとけずり易さを利用して、釣針や銚を作つたり、木の浮くのを利用して舟を作るなどである。道具のはじめは、粗大で簡単であつて、自然物と余り違わない程度のものから、次第にその使用目的にかなつた精巧なものへと進んで行つた。

人間の知識が次第に進んで来ると、自然物をそのままの特性によつて加工して道具を作る時代から、自然物の

もつ化学的变化を利用して道具を作るようになった。その最初に作つたのが土器である。粘土はやわらかく、水に融け易い性質をもっているが、火の熱によつて硬くなり、水に耐える性質をもつようになる。この性質を利用して土器が作られるようになった。この土器が作られたということは非常に重要なことで、人間の文化の発展にとつて飛躍的な出来事であつた。

なんとなれば、従来は自然物のあるままの性質を利用して、それを加工して道具を作ることしか知らなかつたものが、自然のままにあるものの性質を変えて道具を作るようになったからである。また火は今までは、暖をとつたり、物をやいたりする程度のものであつたが、火を利用して新しい道具を作ることを知ることになつた。これは後に金属器の道具を作る素地を与えたことになる。また人間の生活文化の上から見ると、食物を貯蔵し保管する容器を知つたことである。また従来焼くかあぶることしか知らなかつた人間に、煮て食べることを可能にした。このような意味において、土器の出現は重要な意味をもつていたので、モルガンという社会学者は土器の無い有るとによつて、野蛮時代と半開時代とにわけた。また今日、石器時代が旧石器時代とに分けられる場合、土器の有無に相当関係がある。そして人間がこのような土器を作り得るまでになるのに非常に長い年数を経過している。即ち人間の祖先がこの地上に出現したのを五十万年前

と考えた場合、土器が作られたのは世界で一番古いところでも一万年以前に溯らなく、八九千年位前にしかすぎない。

二 旧石器文化

日本で昔から土の中から出て来る土器として縄目の文様のある土器が注目されていて、それを縄文式土器と呼んでいた。この縄文式土器と一緒に矢の根石と云われた石鏃や石のおのなどの石器が発見されて、金属で作つた道具は発見されなかつた。従つて縄文式土器を作つていた時代は新石器時代であるとされた。そして、これらの土器や石器の出るところは、黒土層のところであつて、その下の粘土混りになる赤土層からは何も発見されることがなかつた。

戦後の日本の考古学の発達は、従来日本では人間の作つた遺物が無いと考えられていた赤土層の中からも、石器を発見するようになった。この場合は、今までのように石器と土器と一緒に発見されるというようなことはなく、石器だけで土器はなかつた。土器は土の中に入つていけば風化するが、この赤土層になると土器がなくなり、石器しかない文化となつている。この点から、無土器の文化と呼ばれることもあつたが、土器以前の旧石器時代の文化の存在が日本の国土に実証された。そしてそこから出土する

見るとき、旧石器時代は原始時代で、土器を作るようになり、貯蔵用具の発達と共に農耕栽培の生産の生活が行なわれて来ていることが知られる。しかし、日本では縄文式土器を作つて、土器を非常に利用するようになつた時代になつても、自然物の狩猟採拾の生活を営んでいて、農耕栽培の生産生活を行つていた痕跡がない。

その理由として考えられることは、日本では昔から「山の幸」「海の幸」という言葉があるように、日本の風土、自然がさまざまな潤葉樹を繁茂させて、多くの木の実を供給して呉れたり、この条件がいろいろな動物を棲息せしめて、人間の食料となつた。また四面海で囲まれた状態は、さまざまな魚貝を食膳にのぼせたばかりでなく、川には鮭をはじめ、沢山の魚が泳いでいて、人間の食料とされる条件に恵まれていたことが考えられる。我々は当時の人々の石や骨角で作つた道具を見ると、当時の人々の食生活の状態を知ることが出来る。

木の実を加工するために用いられた石皿や丸いたたき石、狩猟の道具として矢の先端につけた石鏃、投げ槍の先端につけた石槍、獣類の皮を剥ぎ、肉をそぐ(当時は今のように肉は切らない)のに用いた石匕、また漁撈の道具では、骨や角で作つた釣針や銚など、魚網も使用されたらしく石の錘りも土で作つた錘りなども発見されている。

以上の諸道具は図版第四、第五参照。狩猟具としての弓は木のため腐り易く保存され難いが、八戸市是川遺跡は

石器は欧州やアジア大陸から発見されている旧石器とも比較され、日本国土に旧石器時代の存在を物語るようになり、その石器の形から五万年位以前からの棲息が考えられるようになつた。しかも当時日本に住んでいた人間の頭骨や四肢骨が静岡県から発見され、三ヶ日人と命名されて、その身長も男性で一米五十糎と推定されている。このような旧石器は、東北地方での発見例は現在のところ少なく、福島県、山形県、青森県で報告されているだけであるが、北海道には比較的多く、関東にも多いから、岩手県で発見されることも近いであろう。種市町出土の旧石器らしいものを青森県の人で所持している人があると聞いていたが、未だ見ていないし、報告もされていないから、はつきりしたことはわからない。西磐井郡花泉町ではこの当時日本に住んでいた獣骨が多数発見され、それと共に石器らしいものの発見も報告されている。しかし、このような石器が日本で発見されて、その研究がすすめられてから未だ十五年も経過していないから、今後の発見とその研究が期待されている。

三 狩猟採拾の生活

人間が生活する上に必要な食料を栽培生産するような段階は相当進んだ段階であるが、自然にある動物や植物を狩猟採拾して生活する不安定な生活を営む段階は古く、このような時代を原始時代と呼んでいる。世界の歴史を泥炭の湿地のため、弓や木刀まで発見された日本でも珍しい遺跡である。

当時の人々は狩猟採拾の原始生活を営んでいたとは云うが、その当時はそれで一つのまとまりある社会生活を営んでいたと考えられる。最近二戸郡福岡町掘野で発見されたストーン・サークルと呼ばれる石造遺構は、それが墓地であるにしろ、記念物であるにしろ、当時集団生活が営なまれなかつたら作り得ない営造物である。また平内中学校に所蔵されていた青竜刀形石器(図版才五の7図)はその形から実用の道具とは考えられず、何か特別の權威を示す道具と考えられる点、集団の首長のしるしであつたのかも知れない。

また、当時生活の不安定な中にあつても、身を飾る風習があつた。彼等の衣服は夏は裸体で、冬は獣皮を着る単純なものであつたから、身体自身に着けた。それは今日南方の土人が耳たぶに孔を開けてそこに何かぶらさげているように、当時の人々は耳たぶに孔をあけて耳栓をつけ、それにぶら下げたと考えられるものに釣鐘形の土製品(図版才六の7図)がある。その他顔面に入墨をする風もあり、土偶の顔面に見られる文様や線は入墨の形を現わしたものと推定される。また腕には貝で作つた貝輪を(図版才五の12図)をはめて装飾とした。

四 縄文式土器

新石器時代になつて日本人の使つていた土器は縄文式土器と呼ばれている。一概に縄文式土器と呼ばれているが、そのような土器を作りはじめた年代は相当古く、また長い間作り用いられていた。今日そのはじめが何時頃かということが問題になつていて、今から九千年前であろうと云う説もあれば、五千年前位であろうと云う説もある。大体七千年前頃と考へても良いではないかと思ふ。前に述べた大化改新から今まで千三百余年という年数から考へても、相当むかしのことになる。その縄文式土器はそれから二千年前頃まで使用されていた。そうすると五千年間という長い間、縄文式土器を使用していた新石器時代が続いたことになるのである。

このような長い間に作り使用していた縄文式土器は、如何に変化の乏しい時代であつたといつても、少しずつ変化し進歩して来たのである。勿論この間に生活も変化して来た。我々は縄文式土器について、その器形や文様の特色から、早期、前期、中期、後期、晩期の五つの時期に分けて考へてゐる。その夫々の時期の年代がどうであるかはつきりしないが、一応次の表の如く分けられると思う。

第1表 縄文時代の時期区分と町内の遺跡名

時期	今からの実年代	土器の出土地
早期	7000前～6000前	中野大宮 A・B
前期	6000前～5000前	中野有家 種市ゴッソウ
中期	5000前～4000前	平内、伝吉 上のマツカ
後期	4000前～3000前	和座、館野 八木、西館岡谷
晩期	3000前～2000前	たけのこ・高取 八木駅前・西館田

次にその各時期の土器の特徴と種市町での遺跡の状態について述べる。

早期 (図版才一の1、2図・図版才三の1図)
土器は容器であるためには、底が平らで安定性のあるのが本来であるが、この時期の土器は底が尖つてゐる。そして縄文式土器といつても、縄文がなく貝殻文様の土器である。貝殻文はサルボウやアカガイなどの貝殻の腹でこすりつけた条痕があつたり、腹縁を押し付けてギザギザの文様をつけた土器である。この土器片が県内で一

番多く発見されているのは、岩手郡玉山村日戸であるが、それにつぐのが中野大宮 A 遺跡である。

後篇の大宮遺跡の報告で知られるように、簡単な試掘と表面採集で得られたものだけで多数の数量になつてゐるばかりでなく、貝殻文では県内ではじめての復原出来る土器を出した遺跡であることを考へると、非常に重要な遺跡であることが了解出来ると思ふ。

このような貝殻文器を出した遺跡は八戸市及びその周辺に多く、それらのものと類似してゐて、両者の関係のあることが考へられる。そして、尖り底の土器がなぜ作られて、平底の土器が作られなかつたかと云うことについては明らかでないが、当時地面に穴を掘つて、掘立作りの家を作つて住んでいた状態において、地面を床とする場合、尖り底の土器を地面につき刺した方が土器を安定させるのに都合がよかつたのかも知れない。

大宮遺跡出土の石錘 (図版才四の6図) は岩手県早期のものとして、この遺跡のもの以外にない。

前期 (図版才一の3・4・5図・図版才三の2・3・4図)

縄文は撚糸文と縄文に分けて考へられる。二本の繊維を撚り合せて作つた撚糸を押し付けたり、それを細い棒に巻き付けたものを回転させて付けたものが撚糸文であり、三本以上の繊維を撚り合せて作つた紐や撚糸を二本以上撚り合せて紐を回転させたり、それを棒に巻きつけたものを回転させて付けたものが縄文と云われている。

昔縄席を押しつけたと考へられた説は否定されている。そして縄文や撚糸は色々の組み合せ方で、更に文様の上から色々の名称が生れてくるのである。

この撚糸文を含めた縄文の土器は、早期の末から現われてくるが、前期の時期に著しく発達して来るのである。この時期の縄文式土器は岩手県では盛岡付近を境として、県北から青森県、北海道南部地方を範囲として、円筒式土器と呼ばれてゐる丸い筒形の器形の土器が盛んに作られてゐて、県南方面の深鉢形の土器と異なる特色を示している。文様の点においても円筒式の土器は縄文と撚糸文が盛行しているのに、県南の方面ではその他に竹管文 (笹竹を半分にして押しつけた瓜形文やそれで平行した線を引いた文様) などが施されている。このような地域による土器の器形や文様の相異は早期の時期には、東北、北海道を一円としては見られなかつた点であるが、この時期を特色付けてゐる。

この前期の円筒式土器は大きく四つの時期に分かれて変遷して行つたと考へられ、それを古い方より下層 A 式、下層 B 式、下層 C 式、下層 D 式と分けられている。このうち下層 A 式の土器を出す遺跡が種市町のゴッソウと中野有家である。共に復原可能の土器を出している県下で重要な遺跡である。

この両遺跡共丘陵の斜面に位置し、現在の地形から考へると非常に不安定なところに位置している。当時の地

形も今日と大差ないとみななければならぬが、樹木の生い茂った景観は今日畑となつて居る状態と相異していることを考えると、一部を切り開いて居をかまえたとき、傾斜面の方が見はらしがよく、住居としては好適であつたのかも知れない。前期末円筒下層D式の土器は城内出土といわれる図版第三の4図に示したものがあつたが、その精細な出土地は明らかでなかつたが、この土器の出土地は前期末の良好な遺跡と推定されるものである。この種の土器の多数出土しているのに九戸村田代遺跡がある。(岩手大学学芸学部年報に発表した拙稿あり)

中期 (図版才三の5図)

狩猟採拾を生業としていた縄文時代において、中期の時期は特徴ある発達を示した時期である。その作られた厚手の力強いたくましい気力にあふれた土器から、当時の狩猟民の活力に満ちた生活を推定することの出来る時代である。この時期の県内の遺跡は著しく多くなり、土器も大形の立体的感じのする厚手の土器が作られている。この時代の代表的土器は中部地方から関東地方に出土しているが、北奥地方もそれらの文化に關聯して、厚手の土器が作られているが、文化の大勢は前期の円筒文化を繼承して、それを発展させたものであつて、これを円筒上層文化と云つてゐる。

円筒上層式土器は円筒下層式の上から出土するというのでその名が付けられているが、前期の円筒下層に比べ努力がなされるようになった。その結果が、集团的狩猟漁撈法の実施、食物の保存加工の工夫などである。例えばこの頃は狩猟の道具である石鏃の形にも様々のものがあると共に数も相当多くなつてゐる。石斧などの形も整つた美しい仕上げのものがある。土器での著しい変化は、精製と粗製土器の区別がはつきりし、日用の貯蔵用や煮沸に用い粗製土器は深鉢形で単純な縄文だけのものであるに、精製土器は比較的小形で、文様も美しく施されている。平内中学に所蔵する和座出土という壺形土器はこの頃のはじめのものである。この土器は下の方に孔が開けられていて、何に用いたのか明らかでないが、特異な土器である。これに關聯してこの頃では実用的以外の土製品が作製されている。例えば釣鐘形土製品(才六の7図)は垂飾用装身具の一種でないかと思われる。また土印と呼ばれている用途不明の土製品もある。土偶といわれる人形の土製品もこの頃に沢山作られている。一つの護符のような役割をもつていたのではないかと思われる。このような実用以外のさまざまな土器その他土製品が作られている社会においては、人々の生活が次第に複雑になり、集团的生活も営まれて来て、そこに一つの習慣のようものが生れて来ていることも考えられる。最近報道されているストーン・サークルと云われる環状列石の石造遺構もこの頃のものに大規模なものがあり、それが墓地であるか祭祀場であるか、また両方の意味をも

て、口辺部が波状の突起をもつようになり、その口辺部に粘土紐をはりつけて、縄をからみつけたような隆起線文をつけた土器となる。このような隆起線文の施すのに応じて口辺部も肥大してきている。この円筒上層の土器は最初の単純なものをA式とし、その隆起線文の著しく発達したのをB式と呼んでいる。図版に示したものは右上がA式である。

この種の破片は伝吉に多数出土しているが、玉沢氏所蔵のものは有家上のマツカ出土のものであり、平内小学校保管のものは出土地不明であるが、恐らく学区内から出土したものであろう。

中期の中頃にも隆起線文で渦巻形の文様をつけた土器が岩手県では多くなり、県北の地方にも多く発見されているが、種市町内では今度の調査中にはついに見ることが出来なかつた。これについては今後の調査によつてその有無を明確にしたいと考えてゐる。

後期 (図版才一の7・8図・図版才三の6図)

原始時代の狩猟採拾の生活も、今から三〇〇〇〇年前頃になると相当進んで来た。海を隔てた中国では、この頃には青銅器の文化も発達し、農耕生活も著しく発達して来た。しかし日本では、依然石器だけを使用していた、原始狩猟採拾の生活を営んでいる状態であつた。それでも長い狩猟採拾の生活を経過している間に、その生活に改善工夫をこらして、より良い生活の安定をはかる

つていたか明らかでないが、このようなものが作られるところに集団の一つのきまりを見出すことが出来る。

今度の調査で、实地に踏査したところでは館野遺跡から後期の土器(図版才三の6図)が多数採集されている。表面採集ではあるが多数の石器が採集された。角浜小学校所蔵の渋谷出土の後期の土器(図版才一の8図)は香炉形の土器である。玉沢氏所蔵の西館岡谷出土の種々の土製品は後期のものと考えられ、種々の珍しいものがあり、当時の進んだ文化の状態を推測することが出来る。

晩期 (図版才一の9・11図)

縄文時代の最後の時期である。この期の縄文式土器は薄手の精巧な土器で、雲形文、ワラビ状文、工字文などが美しく施されている。この頃の日本の文化は東北地方が最も発達し、精彩を發揮した。そしてその文化は関東、中部地方から幾内の地方にまで影響を与えていた。

この時期の土器は陸奥式、出奥式とも云われ、青森県亀ヶ岡出土の土器によつて亀ヶ岡式土器とも呼ばれたが、最近では大船渡市大洞貝塚出土の土器を標式として大洞式として大洞式土器と云われ、古い方からB式、B₁式、C₁式、C₂式、A式、A'式の六型式に分けて考えられている。この頃は石器時代の文化も著しい発達を示し、種々の精巧な石器を作り出している。

殊に、注目すべきは八戸市是川遺跡で、そこからは晩期の土器と共に多数の木製品が発見されている。その作

りは大変精巧で金属の道具をもつて加工したのではないかと云う人がある程であるが、金属器の発見されたものはないから、石器で作られたものであるが、それ程精巧な作りである。また漆を塗つた木製品もあり、その美しい文様に、その文化の進歩の著しさを知らることが出来る。

この遺跡は泥炭層のため幸い木製品が保有されたのであるが、縄文の遺跡はこのような状態の遺跡がないので、同様な文化を他に見ることは出来ないが、他の晩期の遺跡でも同程度の文化を所有したと考へても良いであろう。石器や土器では精巧な遺物を出土する遺跡は種市町内に

第三章 上代の種市

一 彌生文化

人間社会の発展は、狩猟採拾の自然経済から農耕栽培の生産経済の段階に入ることによつて一段と進歩したと考へられる。農耕生活は人々を一定の場所に定住せしめると共に、土地支配に対する関心を高めた。そして集団的な統制のある社会を必要とした。

日本人の農耕栽培は米作りからはじめられたと考へられるが、この新しい生産技術は、狩猟採拾生活の不安定な状態を克服するために日本人が考へ出したものなのか、

も相当ある。中でも竹の子、高取、戸類家、西館などは注目すべきものであろう。いずれも本格的な調査が行なわれていないから、今後に期待されること大である。

この晩期の土器は余り精巧で秀れていたので、東北地方で相当後まで使われていたものであろうとし、それが蝦夷(エミシ)の文化と考へたのに喜田貞吉などもあつたが、現在では二千年前頃までで終末をつけ、新しい彌生文化の影響が岩手県にも及ぶようになり、文化の内容が變つて行つたと考へられている。

外国からの影響によつて習得したものなのか議論のあるところだが、前章に述べたように「山の幸」「海の幸」に恵まれた日本人は、狩猟採拾の生活が不安定ながら、それに安住する傾向が強く、それを打開して新しい技術を考へ出すこともなかつた時に、大陸方面から新しい文化の刺戟があつて、米作りの農耕を営むようになったものとする。なんとすれば、この米作りの文化が起つた際には、新しい土器の製作が行なわれ、それと一緒に従来知らなかつた金属器の使用が行なわれている。この新しい土器が彌生式土器である。

この新しい彌生式土器は、はじめ東京都本郷区の弥生

町から発見されたことから、この名称が付けられたが、一番最初作られ使用されたのは北九州地方であつた。この農耕栽培の彌生文化は一度日本に入つて来ると、狩猟採拾の不安定な経済生活に苦しんでいた日本に、急速に採用され、比較的短日時の間に日本全体に波及することになつた。彌生文化の入つたのは二千年前頃であるが、二百年経過した二千年前頃には関東地方から東北地方の一部にまで及んだことであろう。そして岩手県にも千八九百年前頃には入つて来たと思へられる。

彌生文化の米作りの技術は、今日の農業のように進んだものでなく、生産高も低かつた。従つて米を作つたからといつて、農業だけで生活したのではなく、従来の狩猟採拾漁撈に依存する生活によつて、その生活を支えていたと考へられる。彌生時代の銅鐸の絵画に、農耕生活を物語るものがあると共に狩猟や漁撈の絵画のあることは、当時の生活を物語つていと考へられる。これも農耕生活も相当進んだ畿内のことであるから、米作りでは気候的に恵まれない東北地方の北部では、未だ狩猟漁撈の生活が相当残つていたのであろう。そのためか、東北地方で作られた彌生式土器では、相当縄文的な名残をとどめていて、縄文の地文のある彌生式土器が出土して、一般に知られている彌生式土器とは違つた彌生式土器が残存している。種市町出土の彌生式土器も同様であ

る。

また、その出土地も農耕生活が営まれたかどうかと疑わしいところである。大宮の彌生式土器の採集される地点は、縄文式土器の採集される場所と同一であり、その範囲は狭い。下閉伊郡岩泉町赤穴の彌生遺跡は、人が歩いて行くにも不便な断崖の中腹にある。従つて、彌生式土器が出土したからと云つて、東北地方北部では、西日本に見られたと同じ文化様相を呈したとは考へられない。また静岡県登呂に見られた農業経営が行なわれたとも考へられない。

しかし、大宮に出土した彌生式土器は、新しい文化との接触交流の結果作られたものであつて、農耕や金属器を全然知らない人の文化ではない。水沢市出土の彌生式土器には靱痕があり、青森県の田舎出土の彌生式土器にも靱痕あり、米作りを知つていことが明らかになつて

いる。なお、岩手県の彌生式土器の作られた頃用いられたアメリカ石鏃(図版才五の10図)は大平から出土している。これも彌生式文化との接触交流のあつたことを物語るものであつて、種市町にも農耕の知識が相当早く入つて来ていることが考へられる。

二 古墳文化と大和文化

彌生文化が大陸文化の影響により日本に展開したこと

は、日本文化の発達に新しい転機をもたらしたことは既に述べた。殊に金属器の使用は目新しいことであつた。この金属器の使用のうち特に鉄器の使用の普及発達は政治的に新しい事態を出現した。それは統一国家の成立である。

弥生時代に小地域的な統治力が成立した状態について、中国の文献（漢書、後漢書）は日本は百余国に分立しているとして記しているが、鉄による刀劍、甲冑などの武器、武器の発達によつて強大な軍事力が形成され、小国分立の状態から統一国家の成立の方向へ進んで行つた。その時大和地方に成立したのが大和國家である。その頃各地方地方にも統一國家が形成されて行つたが、それらは後に次第に大和國家に支配統合されて行くことになつた。この強大な支配権力の成立を物語るものが古墳である。古墳とは古代の強大な支配者を埋葬するために築いた高塚式の墳墓である。大和朝廷の古代の天皇の御陵は大きな古墳である。中でも応神天皇陵と仁徳天皇陵はその平面的規模においては世界最大の墳墓である。古墳は古代の天皇ばかりでなく、その國家における有力な豪族もそれに倣つて古墳を築いたから、今日大和地方をはじめ各地方に大きな古墳が存在する。

大和國家が成立して、この古墳の築造されるようになつた年代は何時かというところ、今から千七、八百年前頃と考へられている。従つて、考古学的に見ると千七、八百谷助平古墳、岩手町浮島古墳などが有名である。県北では金田一村に古墳のあつたことが報せられているが今はない。青森県三戸郡鹿島沢古墳がある。その他軽米町から古墳から出土する葦手刀が出土しているから、その他にも古墳が所在するかも知れないが、現在のところ明らかでない。

これらの古墳は角塚古墳が径三十米ほどでやや大きいのが、他の古墳は径十米、高さ一米内外の小円墳が主であるが、これら古墳からは鉄製の直刀、葦手刀、小刀、鏃などの外に、鉄の馬具や斧先き、鍬先きなどが出土している外、勾玉、管玉、切子玉、小玉、練玉などの装身具も出土している。これらによつて古墳の築造された時代には鉄器が普及して、鉄の刀劍が用いられ、農具などにも鍬先きなど鉄が用いられている。そして、玉類の装身具を見るとその文化程度も決して低いものでないことが知られる。

このような文化程度を示す岩手県の古墳は誰れが築いたもので、何時頃のものであろうか。熊野堂古墳や西根古墳から和銅開珎が発見されている点から、和銅開珎が作られた後まで作られていたことは明らかである。従つて奈良時代に入つても作られていたものがあるが、平安時代になつても作られたかどうか恐らく蝦夷が平定された以後は作られなかつたと断言出来る。

なぜならば、平安時代に律令政府から派遣された武將

年前頃が日本國家の起源になるが、これは今日の歴史の研究の上からも妥当な年代と考へられている。二千六百年前は既に述べたように、日本書紀の時代に推定した年代であつて、その頃の日本は原始時代の狩獵採拾の生活を営んでいた頃で、國家などというものが生れて来る時代ではなかつた。

この古墳を築造する習慣は大化改新の際「薄葬令」という、古墳の築造を禁ずる命令が出されるまで続いたが、辺境の地方ではその習慣が残り、奈良時代になつても築造しているところもあつたが、平安時代になると全くなくなつたと考へられる。この古墳の消滅には、仏教の傳來による寺院の建立が關係ある。即ち人々は死後の世界について、立派な墓を作つて安心するより、寺院の建立によつて安心を求めることになり、その方面に力が注がれるようになつたからである。

弥生文化の入つて来た東北地方にも、当然この古墳築造の風が伝わり、各地に古墳の築造が行なわれている。宮城県では長さ百七十米もの大きな古墳が築かれている。律令政府に抵抗する程の力をもつたエミシンの住んでいた岩手県にも古墳の築造が行なわれている。

岩手県の古墳は北上川流域地帯に多く、南の方から花泉町永井古墳、胆沢村南都田角塚古墳、金ヶ崎町西根古墳、江釣子村猫谷地古墳、五条丸古墳、花巻市熊野堂古墳、矢巾村蝦夷森古墳、盛岡市太田蝦夷森古墳、西根村

やその外の人々の間に、既に古墳を作るような習慣は全くなくなつていたし、彼等は仏寺の建立などに努力しても古墳のようなものは築造することは考へられない。また在来の蝦夷勢力もその有力なものは、この新しい政府の力に屈服してしまつて、古墳を築造するような力を失つてしまつていた。

このように考へてみると、岩手県の古墳は、エミシと云われた人々の築造したものであることが明らかで、その中にさまざまな宝物が副葬されているところより考へると、蝦夷の中でも有力者が、このような古墳を築造して葬むられたものと考えられる。

従つて、このような古墳は広い平野部をもつて、強大な力を確保出来るようなものの出現する、地域に出来たのが普通であつた。このようなエミシはその古墳の内容が物語るように強力な軍事力をもつていたので、それは前に述べた日本書紀が伝えるような低い文化程度のもものではなかつたのである。その農耕生活については、次の土師器のところで説明しよう。

三 土師器と農耕生活

古墳時代に使用されていた土器が土師器といわれる無文の素焼の土器である。この土師器は、岩手県の場合、前期と後期の二種に大別出来る。後期土師器については次の平安時代の項で述べるが、前期土師器はロクロを用

いないで、輪積法で作った土器で、土器の表面に刷毛目痕や篋痕などがあるが、文様はない土器である。器形は壺、甕、甑（コシキ）、皿、（鉢）の四種乃至五種の器形の土器が一組となつて出土することが多い。

この土師器は弥生式土器以後、農耕の普及発達と鉄器の使用と関係して、広く日本全国に行き亘つた土器である。農耕と米食の生活について、この土器の底部には穀痕のある土器が多いことや、コシキと称せられる土器が穀物を蒸すセイロの役割を果たした土器であることによつて知られる。むかし米は今のように炊いて食べるのではなく、蒸して干したホシイイ（糠）として食べたのである。土師器は岩手県古墳の作られていた時代に、そこに古墳の有る無しに拘わらず、広く行きわたつていた土器で、エミシと云われた人々の用いたものである。

この前期の土師器の存在は、平安時代以前に鉄器の使用と農耕の行なわれたことを物語るものである。種市町でもこの種の土師器が出土している。殊に横手地区の開田の際は、多数の土師器が出土して、そこに当時の集落のあとさえあつたことが考えられることは、開田当時の出土土器を採集しておいた佐々木剛一氏の談話によつて推定される。その他角ノ浜、大久保、中野の有家の向ながれや黒マツカからも出土している外、城内にも出土している。

城内の梅内氏の畑から出土した土師器は、壁土を採取

四 平安時代の種市 付角浜の千人塚

大化改新によつて新しい国家体制をつくりあげた日本の天皇制律令国家の東北経営は、その着手以来百五十年を経た弘仁年間文屋綿麻呂によつて完遂された。その結果岩手県はエミシの支配から、律令国家の支配に入ることになつた。ここに岩手県の地域が日本国家の範囲に入ることになつたのである。

この東北の蝦夷征討は、野蛮無智な蝦夷の支配から解放して、正しい良い政治を行うという形で歴史は述べているが、征服ということは、征服者にとつては聖戦という形で行なわれることは今も昔も変わらない。東北に住んでいた人々を無智野蛮な異人種であるとしたのは、征服者の立場で書いた歴史であつて、征服された蝦夷の人々の声は書かれていない。当時東北殊に岩手県に住んでいた人々が、果して野蛮無智な異人種であつたか、既に再三に亘つて述べて来た。

しかし、大和國家が国内を統一して日本国という一つのまとまりをもつた時期が、おそくとも五世紀初頭とすれば、九世紀の初め東北経略が完成するまで、四百年間東北地方の蝦夷はそれに対立する勢力として存在した。従つて、その征服後相互の融和を計るために、人民を相互に移住させたり、仏教による順化を目ざして寺院を建立したり、神社を建てたりした。しかし、岩手県の場合

するため畑の一部をけずり取つた時完全な壺が一個出土したので、それを城内小学校に持参したところ、長岡善一郎氏の目にとまり、早速今度の調査で現地に行つて調査したところ、破片となつていたがコシキ、甕、皿が採集され、土師器の一応のセットが得られたのは幸いであつた。これら種市町の土師器の出土は、いずれも偶然の発見で、しかもその土器を保存しておいたものが目に触れたに留まつているが、これ以外に散いつつてしまつたものも相当あることが考えられるとすれば相当広く行き亘つていたと考えてよい。それにつけても思うことは、偶然の遺物の出土発見があつた場合、好奇心にしろそれを保存して、心ある人に見てもらふことが、その地の文化の解明に大きく役立つということであつて、いたづらに捨て去つてしまふのは残念なことである。

種市町にもこの種の土師器が多く出土しているということは、都を離れた僻遠の地にも、平安時代の蝦夷平定以前に、既に鉄器を使用して、農耕を営んでいた人々が住んでいたことを証明するもので、これが野蛮無智な先住民と考えられていたエミシの実態であつた。そしてその土器の出土する住居址を見ると、関東や畿内地方の一般農民の住居址と変らない状態であることも明らかになつて来ているのである。

その重点は北上川流域地方に置かれたことは、和賀、稗貫、志波郡が設置されており、延喜式に記載されている神社も志賀理和気神社（紫波町赤石）が北限であることによつても知られる。また平安前期の仏像も北上川流域地帯に多いこともこのような事実を物語つてゐる。

この新しい律令國家の支配が、県北地方にどう及んだかについて、既に述べた天台寺以外にとり立て云うものがないのであるが、私は須恵器と後期土師器の存在に、その文化の進展を見たいと考えている。

須恵器とは祝部式土器、陶質土器、朝鮮土器といわれたものである。その名称によつても明らかのように、在来の日本の土器と違つた異質のものである。それは土器を製作するのにロクロを使用していることと、焼き上げの場合に登り窯を用いて焼き上げていることである。従つて、ロクロを使用した痕跡が器面にあらわれており、焼き上りは堅緻で陶質化している。この土器は歴史の上では陶器と書いて「すえのうつわ」と呼んでいるが、後の陶器（とうき）と区別する意味で、須恵器と呼んでいる。

この須恵器は朝鮮の服属、中国との交渉などによつて、帰化人の陶工によつて日本で作られることになつたもので、その時期は四世紀末から五世紀初頭であろう。今から千五、六百年前である。この須恵器の製作は、従来の土師器にも影響を及ぼした。土師器の素焼きの点は変わ

らないが、それを製作するのにロクロを使用することになつたのである。須恵器の影響を受けた土師器はロクロ使用のあとが器面に現われている。この土師器を後期の土師器と呼ぶことにする。このロクロ使用の土師器は底が糸切底(図版才二の9図)のものがある。そして須恵器が製作された時代になつても、日用にはこの後期の土師器と一緒に出土することが多いが、後期の土師器だけ出土することもある。

この須恵器は日本国内において、大和国家の勢力の伸展と共に普及し、各地で製作されたようである。大和国家の勢力の及ばない蝦夷地であつた岩手県の場合、この須恵器と後期の土師器の製作と普及は、平安時代になつてからであると考えられる。胆沢城址などにはこの須恵器と土師器が沢山発見されている。しかし、奈良時代に須恵器のような新しい土器は珍しいものであり、岩手県内で製作されなかつたものにして、既に宮城県では相当普及製作されたものであれば、既に農耕や鉄器の製作などで相互の交渉があつたことが知られる関係において、軍事的な征服、支配という形を見ない以前においても、移入される機会は多かつたと考えられる。しかしそれも一般の民衆の生活に利用されたというものでなく、蝦夷地の豪族に使用される宝物的な意味をもつたものである。そのためか、古墳などから発見される例が多い。一般民衆の生活に入り利用されたのは、平安時代になつて

からである。なぜならば、前期土師器の住居址に須恵器の発見されるのは特殊の例であつて、殆んどない。それに反して、平安時代の住居址には後期土師器と須恵器と一緒に発見されるのが普通である。

以上のような状態で発見される須恵器や後期の土師器が当地方に発見されれば平安時代の開拓期頃に入り込んだ人々が住んでいた場所と考えて間違いないと思う。その須恵器が角浜で発見されている。(図版才二の11図)その器形は胆沢城で発見されている須恵器と同じである。この形の須恵器は野田中学校付近からも数個発見されておる。恐らくこれは蝦夷征討後に入り込んだ人々の文化を示すものである。

野田中学校付近の堅穴住居址の場合、そこには前期の土師器の住居址群もあり、その土器も出土しているので、蝦夷時代の住居を営んだ人が新しい文化を受け入れて住んだのか、蝦夷を放逐して後に律令国家の開拓民が入つて来たのか明らかでないが、平安時代の文化の浸透して来ていることは明らかである。角浜の場合も、付近に蝦夷地時代の前期土師器が出土する場所があるので、野田の場合と同様なことを云うことが出来、同じ農耕民として、当時は似たようなところを住居の適地として住んでいたことが推測される。

角浜の千人塚

坂上田村麻呂が蝦夷征討の時殺した蝦夷の首を葬つた

塚とも云われている。第一章で述べたように坂上田村麻呂の蝦夷征討は北上川流域だけで、県北に及ばなかつたから、若し蝦夷征討の首塚とすれば文屋綿麻呂でなければならぬ。その点九戸郡誌に引用されている種市村誌は「最終の蝦夷征討たる弘仁二年夏秋の候、鎮守府副將軍、百濟の王教雲(筆者注 百濟王教雲は延暦年間坂上田村麻呂大將軍の時副將軍であり、弘仁二年文屋綿麻呂の時はその子でない。)に撃破せられて此地に埋められたるに似たり」とあり、年代は良いとしても、人物に疑問がある。

考えて見るに、平安時代の蝦夷征討の時代に、この種市地区の各地に蝦夷の集落のようなものがあつたことは、前期土師器の出土によつて知られるが、律令政府の軍事力に対抗する程の統制と軍事力をもつていたかは疑問である。なぜなら古墳のような豪族の墳墓が存在していない。そうすると千人塚が築かれるような条件は余り考えられない。しかし、この塚のようなものが何であるにしろ、これを千人塚と呼ぶ土地の人々の意識に、自分たちが新しく来た日本人だとする自尊心と古い野蠻な蝦夷的な要素を一掃して埋没させてしまいたい意識がはたらいていることが考えられる。蝦夷が日本人とは異質な野蠻人と考えられている段階で、日本国内に住む日本人が同質な同胞としての一体観をもつために、古い異質な存在が亡ぼされて一掃されたというように考えるのは当然であり、それだけの意味をもつていた。しかし、律令政府

が東北の蝦夷征討において、蝦夷地の反抗する軍事力を討ち滅ぼしたが、その住民を一掃したとは考えられないし、事実それを順化している。そうすると律令政府の支配は新しい要素を注入することになつたが、在来のものがその根底に存在したことは否定出来ない。蝦夷的な要素は強く東北地方の人々に強くうけつがれて来ていると考える。したがつて、東北人には蝦夷の血がこいと云える。しかし、既に述べたようにその蝦夷は日本人とどう差異があるかは別問題であり、またその文化も決して未開劣等人と一概に蔑視される内容でなかつたことは、再三に亘つて述べて来たところである。

以上の考察に基づいて、千人塚といわれる十六平方メートルの高さ一米たらずの土盛りが、何であるか、純粹に学問的に追求されなければならぬと考える。

五 安倍・藤原時代の種市

平安時代の中頃、律令政治が次第に弛るみ、政治が藤原氏の貴族に左右される頃になると、中央政府の辺境地方の経営の手も弛るんできた。この時に乗じて、強大な地方権力を築き上げて、朝廷に反抗したのが安倍氏である。安倍氏は厨川柵を本拠として奥六郡を支配して強勢を誇つた。六郡は胆沢、和賀、江刺、稗貫、志波、岩手であるから、衣関を関門として、その北の北上川流域地帯であつた。従つて厨川柵に次ぐ根拠地鳥海柵(宗任の居

城)は金ヶ崎町の鳥海柵擬定地で、二戸郡の鳥海村ではないと考える。その頃、県北一円がどうなつていたかは、これを知る資料が全くない。平安時代のはじめに住み付いた人々が細々ながら生活していて、中央政府も安倍氏も特にこれを顧みることが少なかったと考えられる。

その後、藤原清衡とその子孫三代に亘る支配が続いた。藤原氏はその本拠を平見に置いたことは泉南方面の経営に力が注がれ、県北は益々顧みられなかつた。しかしその支配は県北にも及んでいたであろうことは、藤原氏は

第四章 中世の種市

一 鎌倉時代の種市

平泉の文化の華やかさに比べて、中世の武家文化は余り精彩がないように考えられるが、地方の開発や地方の庶民文化を主として考えるとき、果してそうであろうか。平泉の文化の華やかさは藤原氏一門に限られた文化であつて、民衆の生活や文化と何等の関係もなく、却つてその華やかな文化を支える土台であり、犠牲者であつた。その表面の一部の文化が華やかであればある程、多数のものが犠牲とされていた。

それに対して、武士の文化は地方を自分の支えとして、その地力の育成に努めた。平安時代の貴族は、地方民の

北海道のアイヌとも交渉をもつたことによつて知られる。それは年貢として馬や金、米などの徴収はあつたろうが、この地方に文化的施策を行うようなことはなかつた。特に京都の藤原氏の文化を模倣した奥州の藤原氏は、北上川流域から更にその北方の資源を一手に掌握し、平泉にその文化の粋を集中して、驚くべき優れた文化財を築き上げたが、一面地方はそのため犠牲とされたことが、安倍、藤原両時代を通じて、見るべき痕跡を地方に残さないと言ふ結果をもたらしたとも考えられる。

苦しみを知らずに、自己の快樂にふけつていた。平泉の藤原氏も本来は地方の民衆を支えとして勢力を確立したにも拘わらず、民衆の生活を忘れて、都の貴族の生活を模倣し、逸楽にふけつて亡んだ。頼朝が政権を掌握したにも拘わらず鎌倉に本拠を重いたのは、武士に武士本来の地方民衆の生活を忘れず、質実剛健の気風を保持せんためであつた。このような結果、鎌倉時代の文化には貴族的な華やかさはないが、民衆の力が強く伸張して来ることになつた。民衆の力に支えられた文化は、如何なる強権の圧迫に対しても、敢然と争い、その勢力を伸張させて来ていることは、新しい宗派である浄土宗、真宗、日蓮宗などに見ることが出来る。経済的な面においても、

平安時代以上に民衆の経済力の伸張が認められる。

奥州の広大な土地とその民衆の力が、その存在の価値と重要な意義を認められ、その力を發揮したのは中世である。この時代は都と地方との差別がなく、その地方地方のもつ力がそれだけで重要な意義をもち、他と対当の役割を果たした。中央集権の時代は都が中心で、地方は辺境として軽視されるが、地方の力を尊重する時代においては、僻地は存在しない。原始時代に奥州が重要な役割を果たしたように、中世も奥州は重要な役割をもち、その独自の存在意義を果たした。上代において奥州の産金が重視されたが、それは中央に隷属する形で利用されただけであつて、そのことが奥州の文化の向上とは関係がなかつた。

奥州が鎌倉の武家時代に重要な意味をもつたのは、馬である。武士はその生活において馬を必要とした。奥州は古来から馬の産地として知られていた。鎌倉武士もその優れた軍馬を奥州に求めた。宇治川の先陣争いをした池月は七戸立、磨墨は三戸立の馬と云われ、義経の鴨越の乗馬「青海波」は三戸立、熊谷直実の「権太栗毛」は一戸立と云われる。従つて、奥州の藤原氏滅亡後、幕府は奥州の経営に重大な関心をもつた。

文治五年平泉の藤原氏の滅亡によつて、奥州が鎌倉幕府の支配下に入ると、他の諸国のように守護を置かず、奥州惣奉行を置いて、武士の取締りに当たらせ、葛西清

重をその職に任じた。また行政訴訟などの事については陸奥国留守職を置き、伊沢家景を任じた。そして藤原氏の支配地を夫々有功の武士に恩給したので、多くの鎌倉武士の所領が成立し、関東の武士が下向して、その地の経営に当つた。その結果奥州北部の地方にも多くの鎌倉武士が下向することになつた。そして糠部郡(ぬかのぶぐん)が成立することになつた。

糠部郡は岩手郡、閉伊郡以北の地方を総括して呼ぶ名称であるが、この地方が糠部郡として郡名がつけられたのは鎌倉時代になつてからである。糠部五郡と云うことが「南部根元記」などに書いてあるが、糠部郡は一郡としての名称で、これが文祿慶長の頃に二戸郡、三戸郡、九戸郡、北郡などに分れるが、それまでは、分れた名称の郡名はなかつた。

(糠部郡を岩手郡、閉伊郡、鹿角、津軽などを含めて考えている説もあるが何等根拠がない。そもそも五郡という言葉が意味がないのである)

このような広大な面積の糠部郡は、鎌倉時代において馬産地として重要な土地であつたので、鎌倉武士にとつて関心の強いところであつた。南部氏の外、工藤、結城、北条、二階堂、横溝、会田、畠山などの鎌倉武士の所領が成立した。この外在来の土豪安藤氏の所領もあつた。「南部根元記」によれば、糠部郡を南部光行が拝領し、その一門に一戸、三戸、四戸、七戸、九戸、東、北氏を

どが分れて、各地を支配したように述べているが、南部氏が糠部郡全部を拝領したとは考えられないし、またそのようなことは無かつたであろう。恐らく多くの鎌倉武士の所領に分割されたのが事実で、前述の各氏はその一部であつて、未だ歴史に残らない人の名前もあつたと考えられる。

この広大な糠部郡は東西南北の四地区に分け、その各地区にそれぞれ牧場があり、それを一の部から九の部に分けていた。これが四門九戸の制であろう。一つの部に七つの村が所在し、六十三カ村があつた。東門には八戸、九戸が属していたから、種市は東門の九戸に属する土地であつた。

正安三年（西暦一三〇三年）の安藤三郎きぬ女家族申状に「ひかしのかとたね一のもくしきとう四郎（筆者注東の門種市の目司鬼藤四郎）」とあるのは、種市が東門に属することを物語つてゐる。なお種市の目司とある役名は公の役を感じが強い。そうすると種市は九戸の中でも、公田が多く国司の支配地になつていたので、目司が置かれたとも考えられる。この奥州北部地方は未開拓の地のように考えられるが、南部家文書の「氏名不詳入道跡地注文」を見ると、公田が半分を占めてゐる。これにより考えると、この地方に平安時代以来国衙領があり、藤原氏時代にもそれは朝廷の支配地として、国衙の留守所の支配になつてゐた。頼朝は奥州を制圧したとき、藤

原氏の所領は之を没収して有功の将士に恩給したが、留守所の支配地はそのまま先例によつて、その支配にまかせたのである。種市はそのような公田の一つであつたと考えられる。鬼頭氏はその役人の一人であつたと考えられる。

二 南北朝時代

鎌倉幕府の滅亡によつて、建武中興の政治が行なわれると、奥州は関東武士の勢力の根拠地として重要視された。保暦間記に「東国ノ武士、多ク出羽、陸奥ヲ鎮メ、其ノ力モアリ」とか「彼ノ兩國ハ日本半国ナンド申国ナレバ」とかある。従つて、後醍醐天皇は、関東に成良親皇を派遣されると同時に、義良親王（後の後村上天皇）に北畠顕家を陸奥守に任じて派遣せられた。親王の奥州下向は史上はじめてのことであつた。

顕家は宮城県多賀城の国府に入つて、諸政を行うために、奥羽評定衆、引付衆、諸奉行を置いて、国府の役人や武士をその職に任じた。その結果、「東国ノ武士多ハ奥州へ下ル間、古ノ関東ノ面影モ無リケリ」といわれる程の情勢となつた。顕家は奥州北部の糠部地方は国府から遠隔であつたので、南部師行を国代（国司の代理者）として、諸政を執行させたのである。この師行の国代任命は、南部氏が糠部地方をその後制圧する契機になつたと思う。それまで南部氏は甲斐国南部庄を根拠地とする鎌倉武士

で、平泉藤原氏滅亡後他の鎌倉武士と共に糠部郡内の一部の所領を恩給されたが、その本拠は依然甲斐国にあつて、一族の者を糠部に派遣して、その所領の経営に当たせたと考えられる。ここに顕家に依頼されて糠部地方の国代とされ、その後の戦乱は南部氏をこの地に定着させることになつたと考えられる。

建武中興の政治は、足利尊氏の武家政治再興の謀叛によつてくずれた。奥羽にあつた顕家は尊氏の謀叛を聞くや、義良親王を奉じて西上し、尊氏を撃破してこれを九州に出奔させた。奥州軍がその実力を發揮した戦であつた。顕家は再び親王を奉じて、多賀城にもどり、奥州地方の経営に努力した。

九州に奔つた尊氏は、着々勢力を回復して再び、京都進入の機をねらう一方、奥州の武士を自分に手なづける運動を行つた。尊氏は機熟して九州より東上を企て、湊川で楠正成を敗死させ、新田義貞を北陸に走らせて、京都を占領した。この頃奥州も尊氏に味方するもの漸く多く、顕家は多賀の国府を維持出来ず、福島県の靈山に拠つてゐた。後醍醐天皇は京都の危急を打開するために奥州から再び顕家を招いて、尊氏と一戦せしめたが、顕家は石津の戦に敗北し、南部師行もこの戦で討死した。

後醍醐天皇は、その後も奥州の経営に期待するところがあり、再び義良親王に顕家の父親房をつけて下したが、途中嵐に遭い親王の下向は実現しなかつたが、親房は関

東につき、小田、関、大宝などの諸城により、奥州には顕家の弟顕信を遣わして、その勢力の回復に当らせた。北奥糠部地方では南部氏の一族が師行の志をうけついで、五代に亘つて一貫して南朝の味方として足利方と争つて一歩も譲るところがなかつた。そのことが南北両朝の和会、室町幕府の無力化と共に、この地方が南部氏の支配地として成立して行く結果となつた。

この頃の種市の状況を物語る資料は何も残つていない。ただこの頃久慈郡と云う名称が南部家文書に出て来る。久慈が郡名で呼ばれたのはこの文書だけで、如何なる事情で久慈郡が成立したか明らかでないが、糠部郡東門の中で、久慈地方が独立して考えられる程の事情が発生した。その中に結城氏の所領があつたことから考えれば、糠部地方一円を南部師行の管轄下としたことから、久慈を結城氏の所領として独立して取扱つた一時的な処置かも知れない。しかし一面久慈が一郡として取扱われるだけの所領として内容をもつていたとも考えられる。その久慈郡は恐らく野田、久慈地方を含んでいたのであろう。文化の上から見ると、久慈の長楽寺の薬師立像は当時の作であることを考えると、当時久慈地方に相当の有力者のいたことも考えられる。

三 室町時代の種市

南北両朝の合一によつて五十数年に亘る戦乱もおさま

り、一方足利氏は豪族山名氏をおさえ、室町に新邸を築いて幕政を行なうなど、幕府の權威は高まり、その勢力も伸張したかに見えたが、関東地方は足利氏の一族の関東管領の支配下にあつて、幕府の威令は行なわれず、独立して幕府に対抗する形勢を呈していた。その関東管領の勢力も北奥の糠部地方には充分及ばず、各豪族のばつこにまかせられていた。この間に乘じて、南部氏が急激にこの地方に勢力を伸して行つた。

南部氏がこの地方の諸豪族をその支配下に入れて、その勢力を發展させて行くと、諸豪族を結婚政策などによつて一門一族として同族的な体制に組み入れて行き、その支配体制を固めて行つたと考えられる。それが後に、南部一族として、主家から分流して行つたように考えられたが、恐らく血縁関係によつて同族意識を深め、その支配体制を形成したものと考える。その勢力は秋田県の鹿角郡や津軽地方にも伸張して行つた。その結果、後に独立して藤原氏の後裔と称した津軽侯大浦氏も、一時は南部氏を称した時期もあつた。

この南部氏が糠部郡を制圧して行つた際、その中心となつた南部氏が三戸に本拠を置いた南部氏か、八戸に本拠を置いた南部氏かについてそれを明確にし得る史料がない。「南部根元記」や「八戸家伝記」によつて推察すると、南北朝時代に糠部地方に所領をもつていた南部氏が、既に二派に分れて争つていた。それは師行の系統の

南朝に味方した南部氏と、三戸に居た足利氏に味方した南部氏である。南北朝の合一は足利方の勝利という形で終了したことは、三戸南部氏の立場を有利にした上に、当時守行が出て、大いにその勢力を伸張したことが、宗家のとして地位を確保することになつたのではないかと考えられる。

鎌倉時代公領と考えられる種市も、南北朝から室町戦国時代と相続く戦乱は、武士の自由な略奪にまかせられ、形式的な公領は武士の占有地となつて行つた。その領主はじめは鬼藤氏であつたが、何時の頃か種市氏に代つていつた。目代の鬼藤氏が土地に土着した結果種市氏を称したのか、新たに種市氏が起つて鬼藤氏に代つたものであるかは明らかでない。

種市氏は戦国時代自己防禦のために城をつくつた。それが種市城(城内にあり図版第七の○図)である。当時の城は、他の地方でもそうであるように、山城であつて、山を利用して周囲に空濠を周ぐらしてあつた。これは平時居を構えていたのでなく、外敵が侵入して来た時にたて籠つて防衛する逃げ城であつた。従つて不便なところにあつて外敵を防ぐによい条件のところにあつた。平時は平地に居を構えて農業を営んでいるがその生活であつた。

この種市氏も南部氏の勢力の伸張に際しては、その軍門に下り、その地位を保つたと考えられる。その結果、種市氏も南部一門として名を連らねることになつた。即

ち種市氏は北氏からの分れで、北氏は南部信義の子孫とされている。しかし「参考諸家系譜」の種市氏の条を見ると、北信愛(松斎 信直を立て、九戸政実と争つて、盛岡南部氏をもち立てた立役者であり、花巻城を与えられて伊達氏の勢力侵入を防いだ功臣)の言葉として「汝ノ子孫繁榮ナラバ北ヲ以テ氏トシ、割菱ヲ以テ紋トナスベシ、若子孫衰ヘバ、種市ヲ氏トシ、木瓜ニ引竜ヲ紋トナスベシ、種市ハ我家ノ本名ニシテ本工藤氏藤原姓也」とある。このような云い伝えは、南部氏の一族として、重要な働きをした北氏でさえ、異姓の出身であることを物語つていて、種市氏はその分れというより、種市氏がもとで、その分れに南部の重臣北氏があつたことになる。

種市城は南部領内の糠部郡内の二十二城(三戸城、八戸城、久慈城、野田城など)の一つに数えられた山城であることを考えると、糠部郡内において相当重要な城であつた。従つて、南部信直が秀吉から南部領十郡を拝領すると、領内統一の実を挙げ、戦国乱世の豪族の割拠の風を除去するために、その城の破却を命じ、三戸城下に参集させることにした。これより前、九戸政実の叛乱に際しては、信直に味方したので、その所領を安堵せられていたが、天正二十年、一家士として、城下において五〇〇石を拝領する武士となり、その本拠種市とのつながりを失うことになつたのである。

種市氏は、その後慶長六年岩崎一撥の際は七百石とし

て出陣しているが、間もなく罪ありて祿を没収されてい

後 篇

種市町内諸遺跡の調査報告

まえがき

本調査報告は昭和三十六年四月二十八日から五月一日までの四日間、種市町の一部遺跡の調査の報告が主であるが、その調査は後に述べるように、相当の成果はあつたが、遺跡の概況の一部を調査した程度の内容であつた。しかも、この調査を実施するに至るまでに、地元の好学的の方々の努力と関心とによつて明らかにされたところに基づいて実施されたものであり、またその後も地元の人

々によつて明らかにされた諸遺跡も多くあるので、この機会に町内の諸遺跡の状況を明らかにされた範囲で述べ調査を担当した責任ある部分について、知り得た範囲で要点を述べたいと思う。従つて、昭和三十六年度の調査の報告を主体とするが、地元の方々の報告もこの際お許を得て併記することにした。整理編輯その他内容についても責任は筆者にあると考えている。

第一章 調査前の記録

筆者が種市町に実際に足をを入れて調査する前に、種市町内の考古学的遺物遺跡について記述した主なものに、「九戸郡誌」がある。「九戸郡誌」の種市町に属する部分を引用すると、

戸類家について、「本郡内に於ける遺物包含地として有名なるは、種市村戸類家の田ノ沢（俗にタンサツ）及び江刈村字五日市等である。前者は山麓の傾斜した畑地、二三尺を発掘して数多の完全なる土器が発見せられ、なお附近の地下に包含せられるものと思料される。その附近の耕地一面には多くの土器破片が散布している。」とあり、戸類家出土土器として、小鉢形の縄文晩期の土器

が掲載されている。八木の貝塚について、「本郡内には著大な貝塚を見ないが、種市村八木港附近、及び野田村大字玉川字根井等には二三指摘することが出来る。前者は家屋建築の際、断崖に発見されたと云われ」と、記してある。これについてには後に述べる。

住居址では、「本郡内に於ける堅穴は晴山村大字晴山上野場及び中野村等に発見されて居り、何れも群をなしている。」とあるが、中野村の場合、群をなしている堅穴住居址とは、どこにあるものを指しているのか、現在は明らかでない。

そのおわりに、郡内の「石器時代遺物発見地一覧」を載せている。これは東京大学理学部人類学教室編の「日本石器時代遺物発見地名表」より抜録し、それに郡内小学校長の報告を加えたものである。それによつて種市町の分を掲げると次のようである。

第二表 種市町内石器時代遺物発見地名表(九戸郡誌より)

町村	発見地名	種類
中野村	小子内 平	石器 石鏃 石斧
	同 長坂	同
種市村	字八木	石器 石匙 石斧 角器 獣魚角
	字戸類家及小山	石器
	字宿戸及船渡	石器 石斧
	同和座	石器

その後、考古学的遺物遺跡の記述を行つたものを知らないが、筆者が昭和二十八年「考古学提要―岩手県を主とする」を出版したとき、「岩手県先史原史時代遺物出土地名表」を記録として出版したが、当時種市町の実際を知らなかつたので、前の東京大学の地名表と盛岡市で知り得られた資料に基づいて、次のように作製した。

第三表 種市町内石器時代遺物発見地名表(昭和二十八年)

町村	出土地名	出土遺物	報告者名
中野村	中野	石器、石器	小田島祿郎
	小子内 平	石器 石器	
種市村	長坂	石器 石器	同右
	八木(貝塚)	石器 石器 角器 獣骨	
	戸類家浜平	石器	
	小山	石器	
	船渡	石器 石器	
	和座	石器 石器	
	城内	石器 石器	

この地名表作製の際は、種市町内分については現物を見なかつたが、この頃地元には中野小学校長佐々木剛一氏や玉沢重作氏などの研究者がいて、実際に遺物を蒐集保管していることが、昭和三十年の才一回調査によつて知ることが出来、以後急速に種市町内の事情が明らかになり、この報告を記述するまでに至つたのである。しかし、未だ知られずに残つている分も相当多いことが考えられるが、次の機会にゆづり、今日まで明らかにし得たところを報告することにする。

第二章 調査の経過

第一回調査(昭和三十年十月二十一・二十二日)

種市町の遺物遺跡を調査したい希望を早くからもつていたが、実際にその機会に恵まれなかつた。昭和三十年十月下旬久慈市出張の機会が与えられた。その時歴史学に関心をもつておられる佐々木剛一氏(当時種市中学校長)を知る機会を得、その好意ある案内で、同町内の遺物や遺跡を二日間に亘つて調査し、更に八木に住む考古学研究者の玉沢重作氏を紹介され、その蒐集遺物を調査した。その内容の一部について、岩手史学研究二十三号に報告している。その詳細は略するが、遺物では、佐々木剛一氏、平内小中学校、種市小学校、玉沢重作所蔵のものを見学調査し、遺跡ではゴツソウ、たけの子、横手、大久保の諸遺跡を踏査した。この調査によつて学び得た収穫は私にとつて大きいものであつた。この当時の教育長は中野次男氏で、種々便宜を与えられたことを記して、上記の人に併せて謝意を表す。

第二回調査(昭和三十三年十月二十日)

その後、佐々木剛一校長が種市中学より中野小学校校長に転任され、附近を踏査して新しい遺物散布地を発見したとの報告があつたので、昭和三十三年十月また久慈市出張の帰途、佐々木氏の宅に一晚世話になり、その蒐集

品を見学調査し、学校附近の遺跡を案内されて踏査した。案内された遺跡は、海岸近くの丘陵台地で、大字中野の俗称大宮と云われているところで、縄文早期の土器片が地表面に相当多く散布し、石錘も採集されるところで、岩手県では表面に散布しているのでは一番多いかとも見られた。なおその丘陵を内陸側に下りて来た付近には弥生式土器が表面から採集された。この付近一帯は今後調査をする必要のある重要な遺跡と考えられた。

今一つの遺跡は小学校から北の方約一軒の地点にある丘陵傾斜面の遺跡で、大字有家俗称「上のマツカ」と云われているところである。ここは丘陵傾斜面の畑に相当多数の土器片が散布していた。時期は円筒下層の前期と見られるものであつた。早急に調査を必要とする場所と考えられた。なお、「上のマツカ」へ行く途中、俗称「向ながれ」といふ場所、最近住宅建築の際に出土したという土師器の甕と鉢を見学した。

この踏査の際は佐々木校長と一緒に、岩手大学の日本史を専攻して小学校に勤務していた重茂輝子教諭にも同行を願つて、案内をいただいたことを記し、謝意を表す。

第三回調査(昭和三十六年四月二十八日～五月一日四日間)

この調査が本調査で、今までの調査はこの調査を実施するまでの経過と云える。この調査を実施するに至つたのは、昭和二十八年福岡町爾薩体掘野遺跡調査以来、筆者の関係した調査に何かと協力を得ている長岡善一郎氏が、福岡高校より久慈高校種市分校主任として、昭和三十五年に種市町に住むことになつたことにはじまる。長岡氏は種市分校に在任中、是非種市町の古い時代の歴史を解明したいと念願し、町内の遺跡調査を計画した。そして筆者に協力を求められたので、その手続万端を依頼し、昭和三十六年四月末から五月初めにかけて実施するに至つたのが、才三回目の調査となつたのである。

この調査では、町内の重要と思われる遺跡を一通り踏査して、その遺跡の状況の概略を明らかにしてもらい度いというので、土器片その他の遺物が多数発見されている遺跡を踏査し、その遺跡の状況を明らかにすることにした。従つて、一箇所の調査を精密にするということではなく、遺物の包含層の状況調査という程度に留まつた。

四月二十八日 ゴッソウ地区

四月二十九日 城内地区の器台出土地と土師器出土地、

館野の縄文遺物包含地

四月三十日 中野方面、午前大官地区、午後有家地区

五月一日午前 高取縄文遺物包含地

という経過で、本調査を終了した。

この調査は長岡善一郎氏が主催し、筆者が調査を担当

したので、学生三上清治・小針繁・菅原勇一の三君を引率して協力者としたが、種市町には岩手大学日本史専攻として卒業した金沢光孝(種市小教諭)、近藤宗光(平内中教諭)、重茂輝子(中野小教諭)の三氏の他に、山屋洋子(中野小教諭)、板垣宗六(大和小教諭)が勤務していたので、その協力を得た。また中野小学校長佐々木剛一氏には何かと御協力援助を受けた外、久慈高校種市分校の職員、生徒には大変な協力を受け、短日時の調査であつたが、調査した範囲では、一応その遺跡の概要を知ることが出来たのは幸いであつたことを思い、以上各氏の御協力御援助に深甚の謝意を表す。なお種市町長館石基治氏には特に種々の御配慮をいただいたことを感謝する。

おわりに、この調査は初め昭和三十五年十一月に予定して計画を進めたが、天候その他で実施困難となり、雪融けをまつて四月下旬に実施したので、手続その他若干齟齬したところがあり、関係者に御迷惑をお掛けしたところも多く、大変遺憾であつたが、調査の結果を明らかにして御了承を乞いたいと思う。

第四回調査(昭和三十八年三月十一日～十三日)

才三回の本調査の整理のための調査である。殊に才三回の調査の報告を機会に、町内の遺物、遺跡全般に亘つて記述するというので、前に撮影した写真の不備を補つたり、未だ見てない遺物を一応調査して置く必要もあり、三日間を予定して調査した。

遺物で調査したのは、小子内の川崎浩吉氏、八木の玉沢重作氏、町長館石基治氏、中野小学校長佐々木剛一氏、角浜小学校、佐々木綱吉氏、佐々木六郎氏などの所蔵品である。なお角浜小学校校長佐々木利男氏には種々御世話をいただいた。この調査を計画し、あつせんに御努力を願つたのは長岡善一郎氏であつて、その御尽力に厚く感謝する次才である。

以上筆者が才三回の本調査を中心に調査して来た経過の概要を述べたが、本報告書には筆者の調査していない遺跡の調査も記述することになつたのでその主なものを挙げると次の二つである。

その他の調査(その一)(昭和三十六年八月～十二月)

昭和三十六年度に、文部省後援県教育委員会主催で実施した、県内遺跡調査カードの作成による現状調査である。種市町調査員に佐々木剛一、重茂輝子、山屋洋子の

三氏が委嘱された。この調査の報告は、県教委から出版される予定であるが、調査員の了解を得て一部を掲載させてもらうことにした。

その他の調査(その二)

玉沢重作氏、長岡善一郎氏、細越記平氏などの踏査によるものである。玉沢氏は八木に住み、現在八戸市の職場に通勤しているので余り蒐集していないが、十数年前八木を中心とした付近の遺跡を踏査し、表面採集で得た多数の貴重な資料を所蔵保管している。細越氏は角浜中学に勤務し、学区内で出土した遺物を学校に保管整理している。長岡氏は着任以来その方面の関心を示し、町内の遺物所蔵者を操し、その記録をされている。その他筆者が種市町内の学校を訪ね、遺物とその出土地について聴取したものである。

第三章 第三回調査遺跡の概況と出土遺物

一 ゴッソウ遺跡 ②は第4表遺跡名の番号以下同じ

概況

本遺跡は種市駅より国道を一軒ほど南下したところの右手に見える標高五十米ほどの丘陵にある。その丘陵の頂上近く、海に面した東傾斜面に位置し、種市町才十八地割三十四番地三十五番地付近の畑で、通称「ゴッソウ」

といわれている。土器片や石器などが散布している範囲は約二十アールで、現在雑穀が栽培されている。(図版第七の1図)地主は高城要吉氏・板橋千松氏である。

ボーリングによつて遺物の包含状態を調査したところでは、余り良好とは云えず、黒土の堆積層も余り厚くない。調査はボーリングによつて若干手答ある箇所を選び

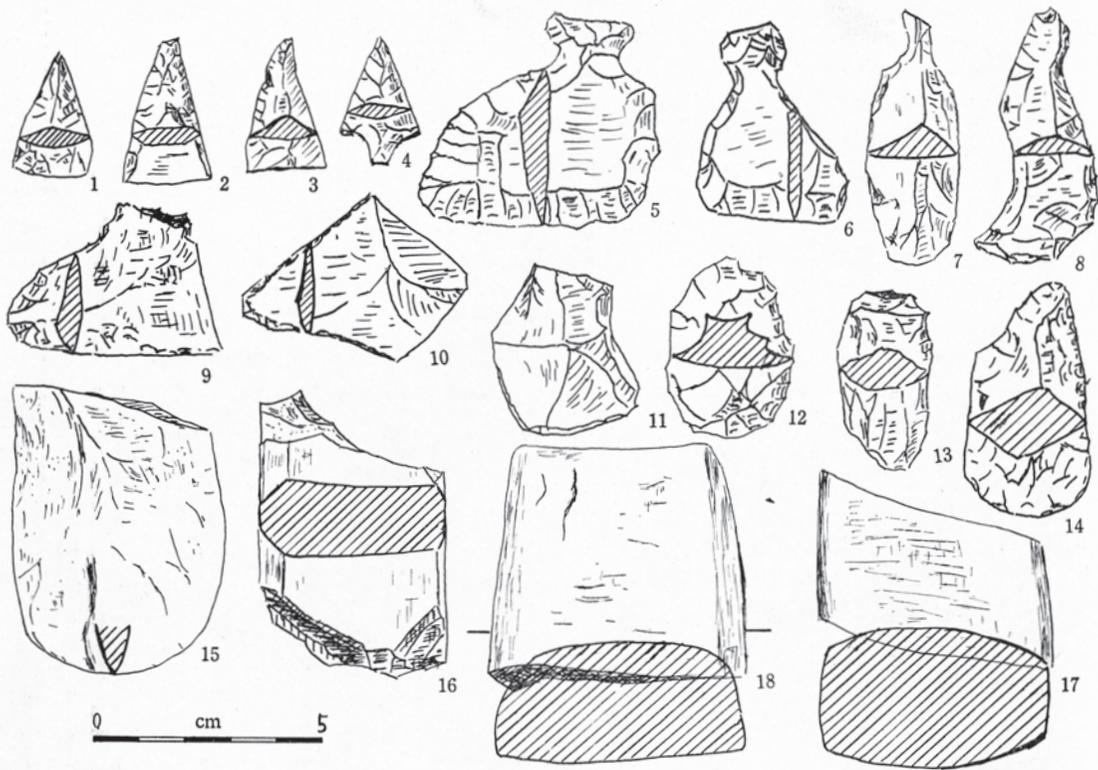
二米に五米の範囲で二か所調査することにした。表土を二十糎の厚さで除去すると遺物包含層に当り、土器は耕作のため相当破損していることが明らかとなった。立つた状態で埋蔵されていたものは上半分が欠き取られ、器口が下に伏つている土器は底部が欠き取られている状態であった。(図版第七の4図)

幸い横倒しになつていたものは、厭し潰されて壊れてはいるが、大体の器形が復原出来る状態で、破片のそろつているものもあつた。(図版第七の3図)しかし、全部の破片のそろつていないものはなく、相当まとまりのあるような状態のものでも、底部がなかったり、口辺部がなくなつていたり、復原は容易でなかつた。しかし、どうにか復原出来るもの三個を数えることが出来た。(図版第一の3図)

地表面から地盤のローム層までは三十〜四十糎程で、包含層に層位的状態を認めることが出来なかつた。従つて表面採集の土器とローム層上から発見された土器片も区別出来ない内容のものであつた。包含層が浅いので、殆んどが耕作のため破壊され、地表面に散布したもので、たまたま耕作の關係上土の中に深く入つていたものが下から発見されたという状態であつた。

出土遺物

採集された土器は、弥生式土器と思われる捺糸を押捺した土器片三片と、土師器らしい刷毛目のある一小片と、



第1図 ゴツソウ遺跡出土石器類(1)
1~4 石鏃； 5~7 A類石匕； 8~14 B類石匕； 15~17 石斧； 18 板状石器

貝殻文のある縄文早期の一小片を除いて、纖維を含んだ縄文前期の土器である。各土器の出土状態の層位関係は判然とせず、いずれも混在の状態出土した。ただ弥生式土器、土師器、貝殻文土器はいずれも表面採集である。縄文のある土器の器形はいずれも円筒形を基本として、胴部か口頸部に幾分ふくらみのあるものもあるが、大体は口辺から底部に向つて直線的に幾分狭ばまつた器形をしている。文様の上から三種類に分類出来る。

才一類は口辺部より底部まで単一の縄文の施文のあるものである。(図版第三の2図左上段の二片) 図版才一

の3はその復原した土器である。才二類は口頸部に口縁に平行に帯状の文様帯が横位に施文されていて、その下には単一の縄文が施文されているものである。口頸部の文様帯は捺糸の押捺した捺糸文を主としたものが多い。(図版第三の2図)

才三類は才二類の口頸部の文様帯と胴部の縄文部の界の頸部に粘土紐をはりつけた隆起線が一条口縁に平行して周らされているものである。隆起線には縄文または刻み目の施されたものもある。(図版第三の2図下段二片) その中右側の破片は一片しか発見されていないが、口頸部と胴部は共に斜行縄文だけで差異がなく、裏面に縄文が施されている。

以上三種の縄文式土器の中一番多いのは才二類土器で、それを見ると、口縁部に篋状のもので刻み目を施したも

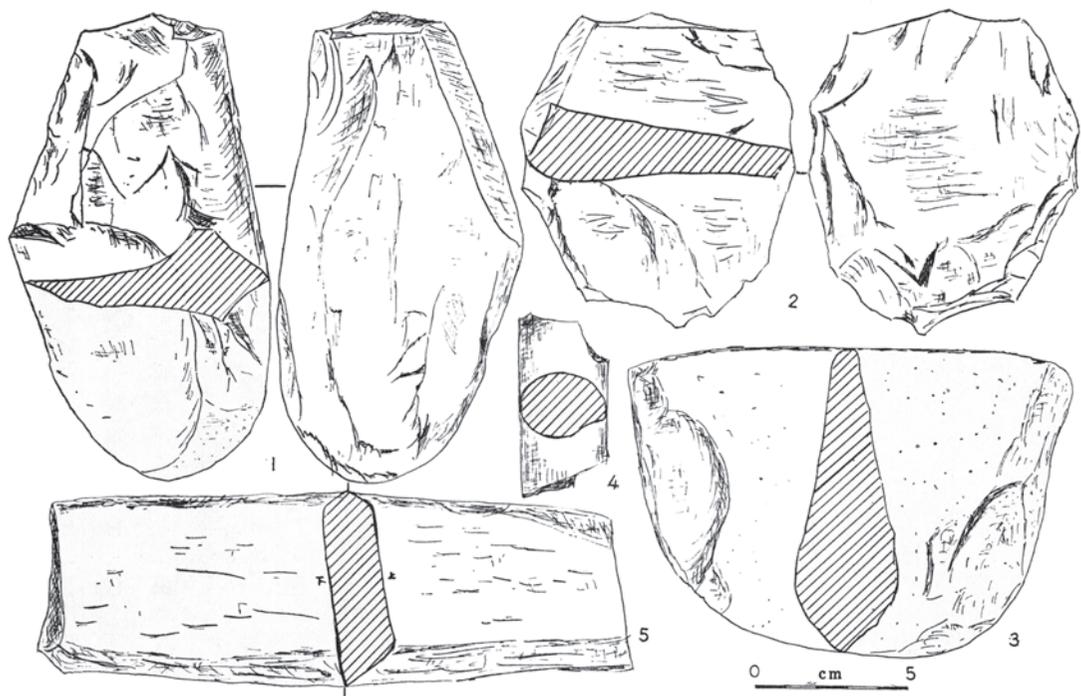
の、また余り目立たないが波状をなし、その先端に刻み目を施したものもある。しかし、この三種の土器は層位的に区別されるものでなく、全く混在して出土した。同時の頃に作られたものとして一括し得るものである。底部は上げ底が多く、器体に纖維を含有している点などと併せ考えて、縄文前期の初めのもので、円筒下層A式とされる土器に属すると考える。

本遺跡で採集され、また過去に採集されている土器も以上の三種の縄文式土器であるが、はじめにあげた弥生式土器・土師器がどうして混入したかは明らかでない。その類似破片の数が余り少ないから、表面採集によつて得られたことだけを報告して、遺跡としては、今後の調査に期待することにした。

今度の調査によつて採集された石器は、表面採集を併せて、二十三点である。種類別によつて、石鏃四点・石匕(石皮はぎを含む)十点、石斧六点、石棒二点、異形石器一点である。(図版第四の1図・2図)

(挿図第一図は図版第四の1図、挿図第二は図版第五の2図の石器の実測図であるので、以下挿図によつて説明するが、図版は適宜参照された。) 石鏃(挿図第一図の1~4)無莖三点、有莖一点である。

石匕(挿図第一図の5~14)石匕は石匙といわれたものであるが、それは皮剥ぎの用を果したと思われる点か



第2図 ゴツウ遺跡出土石器類(2)
1・2 打製石斧；3 横刃形石斧；4 石棒；5 石棒（石剣破片か）

ら石匕の字をあててのが適当と思われる。石匕は普通撮みのあるものを称しているが、撮みがなくとも皮剥ぎの用に用いられたと考えられるものも一括して石匕と称して、そのうち撮みのあるものをA類とし、ないものをB類と呼んで、区別したいと思う。

A類（5・7）は横形と縦形があるが、横形一点で、縦形二点で三点であるが、B類（8・14）は七点で多く、その形もさまざまである。これはその利用価値から皮剥ぎとだけ称するのも一方法であるが、余り適当とも思われない。

石斧（挿図第一図15・17、第二図1・3）は六点であるが、磨製石斧と打製石斧に大きく区別される。磨製石斧は完形品はないが普通の大ききで、うち一つは擦切磨製石斧の形をしている。打製石斧は磨製石斧に比べて大形で、粗雑な打裂れによつて一応の形を整えてあるに過ぎない。それも二種に分れ縦形の普通の石斧の形に近いものと、横刃形と称しているものがある。

横刃形石斧とは筆者の命名したものであるが、石包丁の最初の工程で作られような形をした粗雑な石器で、彎曲部に刃が付けられている。今まで縄文前期末の遺跡や中期初頭の遺跡でしばしば発見し、その報告もしているが、前期初頭の遺跡で発見したのは今度が初めてである。大体前期初めから中期初頭の円筒式土器の出土している遺跡に発見されている特有の石器である。

石棒（挿図第三図4・5）と称した一点は石棒の中央部の一破片であるが、今一つは扁平な細長い矩形状の破片（5）で、一応石棒にしたが、石刀状になつたものか、ただ筥状なものなのか明らかでない。石棒は砂岩でやわらかく、角はいずれも削られている。

板状石器（挿図第一図18）と称したのは、四角な平たい石器の破片で、その原形は明らかでないが、断面は台形をしている。石材は軟質砂岩で脆く、砥石に用いられたよう形をしている。上下の両面は平らに磨りへらされている。

まとめ

以上の調査の結果から推定される本遺跡は、縄文前期の遺物を埋蔵する遺物包含地として豊富な内容をもつて重要な遺跡である。しかし、その傾斜面の地形に立地すること、僅かな範囲の調査であるが、包含層が浅いところにあることなどから、焼土の堆積位は今後発見されるかも知れないが、住居址の輪郭を示すような遺構が発見されることは困難と考えられた。勿論、これだけの諸遺物の発見された本遺跡が、当時の住居址であつたと考へるのが妥当であろう。その際、堅穴住居を営んでいたか、傾斜面を利用した簡単な作りの掘立て小屋のようなものであつたか問題となるが、後者の可能性が多いとも云える。

地形的にこの場所に住居を営んだことは、水の便の悪

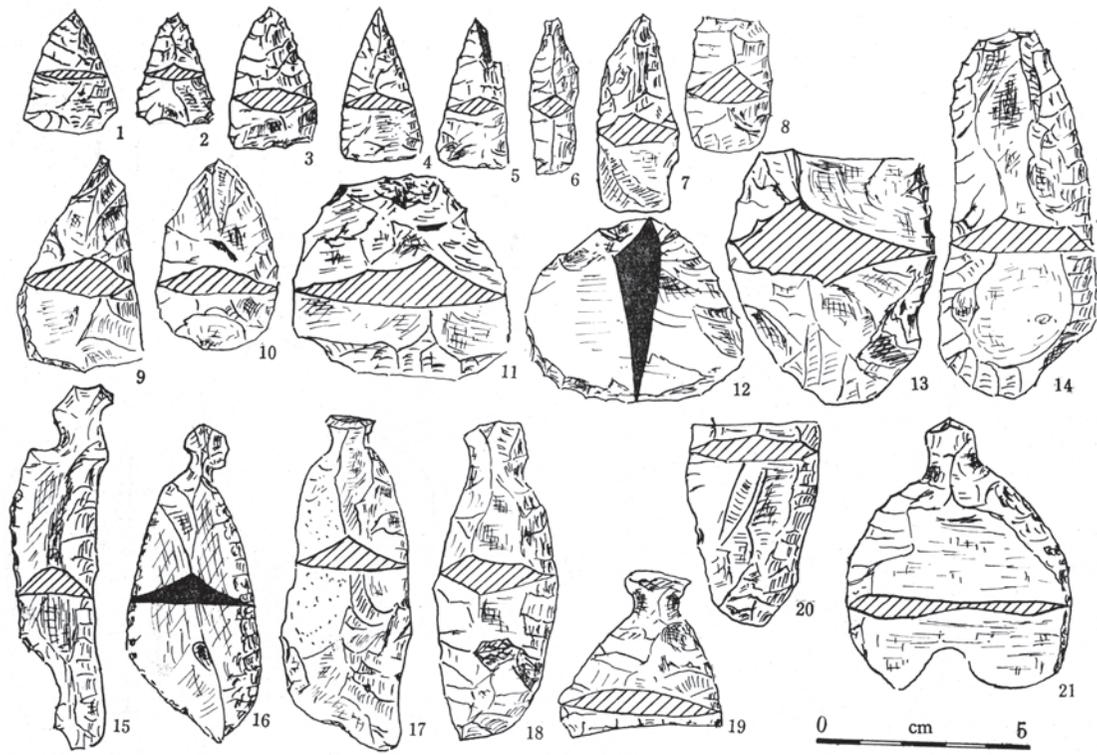
い点から考えると、高くて見晴しのよい所を選んだことになる。小高い見晴しのよい場所は、身の安全のためにも、行動する場合でもよかつたと考えられる。なお、現在この場所は風当たりが強く、住居を営むに適さないが、原始時代樹木の繁茂していた時代には、現在畑となつている状況と相当違つていたであろう。

二 上のマツカ遺跡

概況

本遺跡は中野小学校より北の八木へ通ずる国道を一軒ほど行くと、左手の丘陵の登り口に有家神社がある。その神社背後の丘陵一帯から縄文式土器片や石器などが採集される。調査した地点は神社より二百米ほど丘陵台地を登つたところの南傾斜面の一部である。この丘陵は東に向つて張り出した舌状台地で、その南斜面は十五米ほどの高さで、相当な急傾斜をしている。しかし所により二〜三米下つたところに段があつて、それまで約八米ほどの中で緩傾斜をしている部分がある。この傾斜面一帯の地表には相当多数の土器片の散布がみられる。（図版第七の2）地主は中居松五郎氏である。

調査は急傾斜面のところは困難なので、緩傾斜面の一部を選び試掘溝を入れて、包含層の状態を調査することにした。この場所は雑穀栽培の畑になつている。その耕土となつている黒土の堆積層は浅く、十厘から三十厘ほ



第3図 上のマツカ遺跡出土石器類(1)
1~6 石鏃; 7~14 B類石ヒ; 15~21 A類石ヒ

どしかなかつた。表土を十五種位除去したところに、一
ままとまりとなつた土器片がところどころに発見された。
従つて、ゴッソウ遺跡の場合と同様、包含層が耕土と接
しているため、横倒しになつて厭し潰されているものは
一応形が復原出来るだけの破片は残存しているものもあ
るが、立つた形で埋蔵していたと考えられるものは、底
部か口辺部が残存しているだけで、他は全く散乱して復
原は困難であつた。横倒しになつたものも破片の全部揃
つていないものはなく、一部散佚しまつてゐる。ただ、ゴ
ッソウ遺跡の場合に比べて、開墾されて畑になつた時期
が新らしいのか、表面に散布している土器片も多く、ま
た地中に埋蔵している部分も比較的多く、復原出来るも
のは五個を数えることが出来た。今後耕作によつて年々
破壊されて行く状況にあることを考えると、早急に全面
的調査を実施する必要があることが痛感された。

出土遺物

出土した土器は縄文式土器だけである。その作りや文
様・器形などから見て、ゴッソウ遺跡出土の三種の縄文
式土器の範囲に入ると考えられたが、土器の数も多いだ
け、文様の変化も多い。ゴッソウ遺跡の場合に準じて、
才一類、才二類、才三類に分類した。その文様の特徴は
同一であるから、説明は略する。

本遺跡では、才一類、才二類が多く、殊に才一類の割
合は、ゴッソウの場合より多くなつてゐる。才三類の類

部に隆起線文を周ぐらしあるものに、その隆起紐の真中に
溝を入れて二条の隆起帯のような効果をあげ、更に口頸
部の文様を沈線による直線と波線で施してあるものがある。
(図版第三の3 図右下) 一見異質な感じを受けるが、こ
器体に繊維が含有し、口縁に縄文が押されている点、こ
の場所から他の土器が出土せず、才一類、才二類土器と
伴出している点などから、才三類の変形と考えて差支え
ないと思う。なお、才二類に入る土器片に一片だけ三条
の平行沈線をもつて口頸部の文様帯を構成しているのが
ある。また才三類に入る図版才三の3 図右上の土器は、
隆起紐の溝は撚糸で押えて作つてあり、口頸部の文様は
撚糸を押捺してある点、施文材料が違つても、手法は同
一と考えられる。

本遺跡の調査によつて得られた土器は以上の三種類で
あるが、下の方の畑から円筒下層D式と考えられ、口頸
部の文様帯が肥厚して、胴部に細かい羽状縄文の施文さ
れている破片(図版第三の3 図上段中央)が発見されて
いる外、玉沢重作氏がこの付近から採集したといつてい
る土器片や土偶その他の遺物に、縄文中期の円筒上層A
B式の破片や縄文後期のものがある。殊に獣骨片や骨角
器、貝輪(図版第五の12 図)などあり、貝塚の存在も考
えられるので、この付近一帯は更に精細な調査を必要と
すると考えられるが、参考に一・二の遺物を図版で示す
にとどめ、今後の調査にその精細な報告は期待したいと

思う。

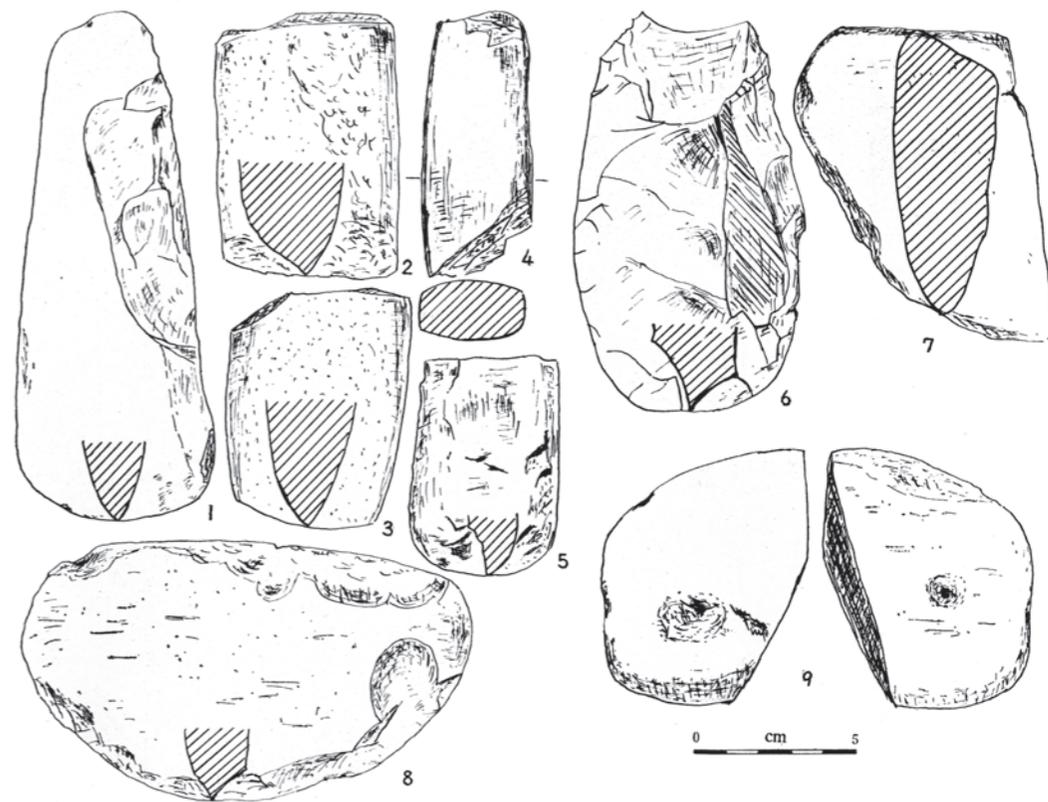
出土石器は三十点で、種類別に云うと、石鏃六点、石
ヒ十五点、石斧九点、板状石器一点である。

石鏃(挿図第三図1~6)は全部無莖の三角形の石鏃
である。その形から前期縄文式土器に伴出して妥当な種
類に限られていた。(挿図第三図は図版第四の3 図、挿
図第四図は図版第四の4・5 図の石器の実測図である)

石ヒ(挿図第三図7~21)はゴッソウ遺物の説明によ
るA類、B類併せて十五点で、A類七点(15~21) B類
八点(7~14)である。A類は縦形が主で、ただ一点円
形で刃部の中央にくぼんだ刃をつけたものがあつた。B
類はゴッソウの場合同様な形が一定しないが、中には縦形
の石ヒの撮みをとれたのを、そのまま形を整えたのでは
ないかと思われるものもあつた。(8)

石斧(挿図第四図1~8)は磨製、敲製、打製の三種
に大別される。磨製二点(4・5)、敲製二点(2・3)
である。打製は打裂のみで形を整えた粗雑な形のもの
と、チップングによつて整形したものがある。横刃形石斧
(7・8)は二点あり、一点は完形であるが、他は半分で、
しかも打石器というより、彎曲部の刃部をこすつて磨り
へらしてあり、磨研用に用いられた痕跡がある。

板状石器(挿図第四図9)で、ゴッソウ出土のもの
と類似し、小形の扁平の石器で、軟質砂岩でもろく、上下
の両面に鑿孔しかけた穴があり、鑿孔する場合の押えと



第4図 上のマツカ遺跡出土石器類(2)
1~6 石斧(うち4 磨製石斧); 7, 8 横刃形石斧; 9 板状石器

した石とも考えられた。

まとめ

以上の出土遺物によつて知られる本遺跡は、調査した範囲に関する限り、前期はじめの単純遺跡として、相当内容のある遺跡で、県下で重要な遺跡の一つと云うことが出来る。しかし前編で述べたように、他の時期の遺物包含地あるいは貝塚さえ存在すると考えられる本遺跡は、広範囲の調査を行つて、その内容を明らかにし、遺跡としての内容を明らかにして、価値付けることが必要と考えられる。その意味で本調査は本遺跡の全般的解明にとつては不充分であつたが、その収穫は少なくなかつた。

三、大宮遺跡

本遺跡は中野小学校より東へ直線距離一軒ほどの海岸に臨む丘陵に位置する。小学校より現地に行くには山間の小径を小一時間歩いて到達する。陸中中野駅より鉄道沿いに北へ一軒ほど進んで、丘陵に登つてもよい。丘陵は高さ三十米ほどで、海岸に沿つて連衡しているが、その一つである。行政区画は大字中野才六地割で、通称大宮と称している。丘陵は雑木林や草地、畑となつているが、遺物は畑を歩いてみると、相当採集される。地主は高屋敷松五郎氏である。

畑の表面には相当広範囲に及んで土器片その他石器などが散布している。海を見下す丘陵の頂上部から、中野

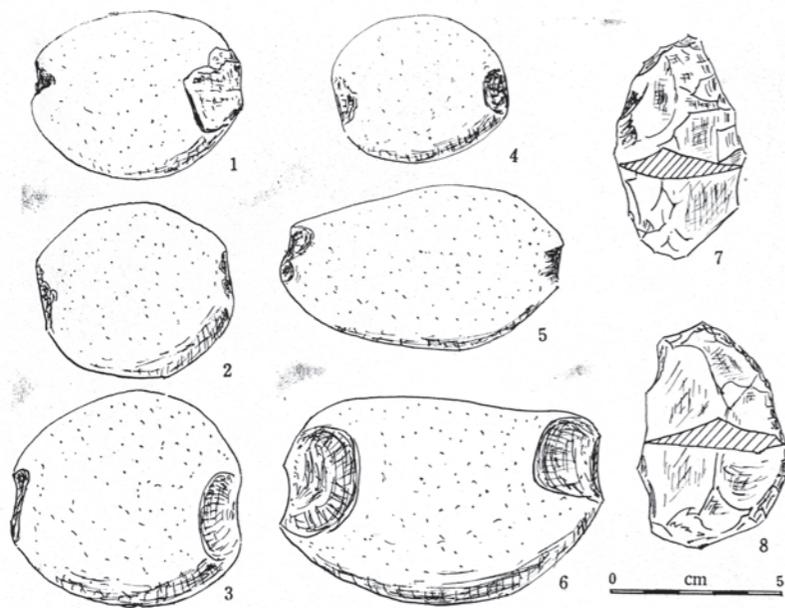
小学校に通ずる山道のある丘陵西側の山合いの麓まで、約二百米の範囲に散布している。従つて、本遺跡を東の方から大きく、A・B・Cと区画すると、A区は海岸よりの部分であり、C区は山合いの丘陵への上り口の麓で、Bはその中間の畑ということになる。以下夫々特徴があるので、分つて述べることにする。

(1) 大宮A遺跡

海を見下す丘陵台地の部分で、ほぼ平らな畑となつている。雑穀が栽培されているが、余り収穫がなく、余り良い土地とは云えない。土器の小破片が採集されるが、全部貝殻文土器で、尖底部近い破片も発見された。平底と考えられる破片はない。図版才三の1図は口辺部の破片のみの写真であるが、表面採集による破片の数は百点以上を数えることが出来る。この破片と混つて、この地区から採集されるものに、石錘と皮剥ぎ用のB類石ヒがある。

石錘(挿図第五図1~5)で、私の関係して採集した石錘だけで十一点あり、その他佐々木剛一氏や中野小学校所蔵のもの十一点以上ある。石錘は径五厘内外の楕円味を帯びた扁平な川原石の両端を打ち欠いて作つたもので八戸市の早期の遺跡に出土する石錘と似ている。(挿図第五図は図版第四の6図の石器の実測図である。)

石ヒ(挿図第五図7・8)は普通の石ヒの形をしたA



第5図 大宮A遺跡出土石器類
1~6 石錘(うち6はB遺跡出土石錘); 7, 8 B類石ヒ

類のものではなく、皮剥ぎ用としての不整形なB類石匕が二点採集されている。

以上表面採集によつて得られた遺物であるので、実際の遺物の包含状態はどうであるかと、ボーリングしてみたが、二十種足らずの耕土しかなく、直ぐ地盤のローム層となつている。海岸で相当風当りの強いところで、耕土が吹き飛ばされるのか、特に包含層らしいものを認めることは出来ない状態であつた。従つて、堅穴住居址らしい痕跡を認めることが出来ず、土器は表面採集だけの小破片にとどまつた。文様から推定される器体個数は、相当あり、図版才三の一図に示した土器はいずれも口辺部だけのものであるが、器体は全部別個体で十四片ありその他胴部・底部と考え合わすと二十個体を超える数になることは明らかである。

(四) 大宮B遺跡

概況

A遺跡より西方へ幾分下り気味の畑を八十米ほど行くとB遺跡となる。この間の畑の表面一帯から早期の土器片が僅かながら採集されるが、B遺跡とした部分の畑になると、早期の貝殻文の土器片の他に、繊維の含有した前期の縄文式土器片の外に、縄文晩期大洞A'式の破片と弥生式土器片が多く採集される。従つて、その地点を中心とする約五アールの畑をB遺跡とした。

A遺跡からB遺跡までの一つづきの丘陵の遺物包含層

深さも地表面から九十種程度の深さがあり、粘土のローム層に密着しているため、湿気を強くうけて、脆く壊れ易い状態になつていたが、注意して掘り上げた結果、復原出来る一個体の尖底土器(図版第一の2図)・器形の推定出来る一個体の尖底土器(図版第一の1図)を含めた五個体分の土器片の集積であつたことが知られた。

このような復原可能土器の発見されて掘り込まれたようなどころは、不整形で人工的なものを強く感じさせながら、もつと掘り抜けて精細に調査すれば、堅穴住居址としての輪郭を明らかにすることも可能と考えられたが、今度の調査は試掘程度に留めて、その追求を避けた。しかし、岩手県で早期の住居址の明らかとなつていない現在、その再度の調査が期待される重要な遺跡であること指摘するにとどめる。

出土遺物

土器では縄文早期の貝殻文土器と弥生式土器とが特に注目に値する。岩手県で貝殻文様の土器片の発見される場所は相当多数あり、中でも玉山村日戸遺跡などではその数量も二百片以上を数えているが、完形または復原可能な土器を出土している場所はない。この大宮B遺跡の調査によつて、はじめて復原された貝殻文の尖底土器が発見されたことは多大の成果と云うことが出来る。一方の復原推定土器は上半部の器形から、八戸市赤御堂出土の尖底土器を参考に復原したものであるが、大方の教示

の状態は明らかでないが、この付近は、ボーリングによつて相当厚い堆積土があり、A遺跡と違つていることがわかつた。そこで、東西二米の中で、南北に長さ十メートルを測り入れて試掘を行つた。

調査の結果判明した堆積土の状態は、低いところに厚く堆積した黒土のようで、黒土の厚さは七十種あり、その地表面近く二十種内外が耕土となつてはいるが、その判別は明らかでない。黒土層の下七十種位から黒褐色の粘土混りの層が二十五種ほどあり、この層は下に行くほど褐色味が濃くなつていた。その下の九十五種からはローム層となつてはいる。この黒褐色の才三層の一部(トレンチ内で四・五米の巾)が切れて、不整形な落ち込みを形成しているところがあつた。

遺物の包含状況は、耕土層を含めた黒土層では、地表面に土器片の散布しているのに比べて、比較的少なく、破片も小さかつた。土器は地表面から採集される弥生式土器片、晩期縄文式土器片や繊維のある縄文式土器片の外貝殻文の破片も採集されたが、層位的関係が明らかでない状態ではない。ただ弥生式土器片や晩期縄文式土器片は下の方からは発見されなかつた。図版才三の8図に示した土器は、表面採集のものを含めた主なものである。

黒褐色の才三層になると早期貝殻文の破片だけとなり殊に落ち込んでいると見られる地点の黒褐色土層では、ローム層に密着して一群の土器片の集積が発見された。

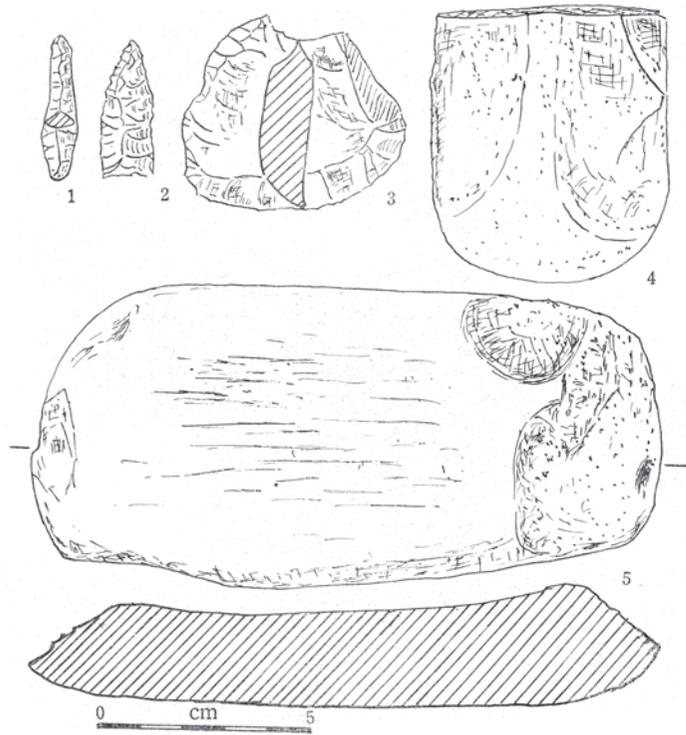
を得たい。両土器共器面は貝殻条痕で調整されたもので、口縁部に貝殻縁のギザギザの刻み目がつけられている。

(図版第一の1図・2図)

弥生式土器は縄文晩期の大洞A'式の工字文や菱形文と一緒に、それから若干変化した文様のもの、二戸郡福岡町足沢出土の弥生式土器と著しく類似している。今度の調査でははつきりした包含層に当らず、大部分が表面採集であるので、その資料を示すにとどめ今後の調査によつて精細に述べたいと思う。

石器(挿図第六図)は表面採集を含め、B地区で発見されたものを5点示した。石鏃2点・石匕1点・石斧2点計5点である。石鏃はいずれも表面採集である。石匕はB類のツマミのない形式で、黒土層下層部から発見されたものである。石斧2点は黒褐色土層の貝殻文土器の近くから発見されたものである。(挿図第六図は図版第四の7図の石器の実測である。)

4の石斧は上部が欠失しているが、石斧状の断面楕円形の自然石の四隅を欠き取つて更に形を整えようとしてあるが、刃部に当る先端は自然面のままである点から、石斧と称するのが適切であるか疑問もあるが、形から受ける印象は石斧の断片であるが、古い石器の一つの形を示している。5は更に特徴のある石器で、扁平な矩形の自然石の一方の先端部に打撃を打ええて刃部を形成しただけの単純加工の打石器である。この刃のつけ方も、片



第6図 大宮B遺跡出土石器類
1. 2 石鏃；3 B形石鏃；4 石斧；5 石斧

面が自然彎曲をしている内側を打ち欠いてつけたもので、打石器として原始的形態のものである。4・5の石材は硬質砂岩である。

(イ) ① 大宮C遺跡

B遺跡付近から丘陵は、南方に下り坂となり、百米ほど下ると山合いの湧き水の出るところになる。小川はそこから水源を発している。その湧き水の出る手前が一段と高くなつて、三十平方メートルの狭隘な平坦部を形成して、灌木の茂みとなつている。弥生式土器片の採集される遺跡であるので、特にC遺跡とした。

この平坦部から上の傾斜面は畑となつてはいるが、この部分は最近まで杉が植えられていたらしく、その根を掘り起して畑にしようとしたらしくも見られるが、充分整地もされず灌木の藪のようになつてはいる。土器片はその掘り返えされたような地表面に僅か散在するだけであるが、岩泉町赤穴遺跡などの出土土器と類似する弥生式土器である。遺物は表面採集されたものだけであるが、果して調査して良好な包含層が発見されるかどうか疑問である。

図版才三の7図に示した土器は、佐々木剛一氏の採集品であるが、私も現地においても同じような土器片数片を採集している。石器類は未だ発見されていない。

四、^② 高取遺跡

概況

種市町で土器の出土するところと云えば高取と云われる程、近年開墾などで土器が発見されたと云われているが、既出土品の完形土器で私の見たものは、館石町長所
有の土器二個(図版第一の9図と10図)である。その他町村に持つて行かれてはいると聞くが、その真偽は明らかでない。

高取遺跡と云つても、その範囲は広く、どこを指しているか明らかでないところがある。なぜなら、高取は種市町のほぼ中央に位置する標高三六〇米の高取山南側の山麓丘陵地帯で、その範囲は広く、精細に踏査すれば、相当の箇所から土器の出土地が発見されるらしい。その中調査したのは今野勝也氏の畑の一部である。

最近今野氏の畑の一部が開田されて土器が相当出土しているといふので、帰省を予定していた日の午前中だけ二時間程、現地に行つて見ることにした。現地に行つて見ると、開田は家のうしろ横に当る、丘陵の緩傾斜地の一部が一二年程前にされたらしく、丘陵の裾が新しい切断面を見せて田が作られていた。その田を縁どつては丘陵際の切断面には、地表面から二十糎位の深さのところ土器片が十糎位の厚さで一つの包含層をなして存在していた。その状態からこの地の開田の際に相当多数の

土器が出土したのではないかと推定されたが、殆んど全部が埋没されてしまつたものらしい。現在でもその断面をえぐれば土器片は採集されるが、切断面が丘陵際の傾斜面にかかつてはいる上に、その部分一帯に大きな樹木が生い繁つてはいるので、調査は困難な状況になつてはいる。

その開田されたところに隣接した畑も近く一アールほど開田が予定されていると聞いたので、この機会にその一部を試掘することにし、巾二米で長さ六米のトレンチを入れて調査した。地表面下二十糎で包含層があり、土器片の出土が見られたが、開田地の上の切断面に見られる程多量の包含状態を示してはなかつた。しかし一か所に山石八個で径四十糎位の円形の囲いをした炉址が発見された。(図版第七の7図)なおその炉址の付近からは浅鉢形の完形土器二個が出土した。(図版第七の6)これら土器や炉址の位置は地表面二十五糎位で比較的浅く、一部耕土に接してはいる状態であつたので、堅穴住居かどうかの輪郭となる壁の存在はこれを認めることは出来なかつた。また充分に掘り抜けて柱穴址などの有無を確認する必要があつたが、当初の日程もあり、一応炉址の確認と土器を採集しただけで、今後の調査に期待することにした。

本遺跡の調査は僅か二三時間の限られた調査でその全貌を述べることは無理であるが、開田をひかえて緊急に全面的調査を必要とするところであると考へた。しかし

しかし取り敢ずの試掘であつたが、種市町としては縄文時代住居の炉址としてはじめての発見であつたことは多大の成果であつた。

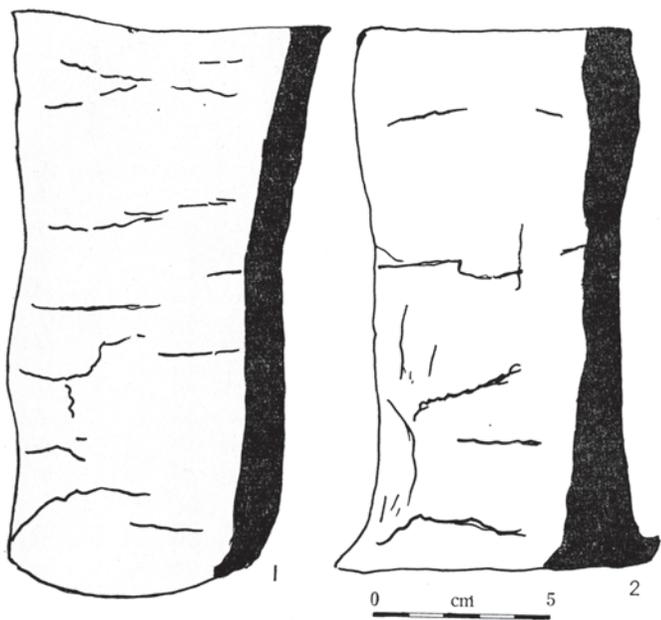
出土遺物

出土遺物は完形土器に二点を含む縄文式土器片若干と石斧二点、石鏃二点、有孔小円盤である。

土器は付近から採集されるものを含めて、縄文晩期大洞C₁式以降A'式までのものである。完形土器の一方(図版第一の11図)は大洞A'式の浅鉢形土器であり、他は大洞C₂式の浅鉢形土器である。両者がどういう関係にあるかは明らかでなく、層位的関係も確認し難かつた。破片として多いのはC₂式である。

なお佐々木剛一氏所蔵の高取採集土器片では後期の掘の内併行式・安行併行式と考えられるものがある他、晩期大洞B式・B₁式の破片もあるが、それらの出土地は高取といつても同じ場所かどうか明らかでない。また図版才一に示した館石基治氏所蔵の完形土器は一方は大洞A式(9図)で、他方は大洞B₁式(10図)である。この出土地の精細も不明である。

石器(図版第五の1図)の石斧と石鏃は特に注目すべきものではない。有孔小円盤と称したのは図版才五の1図の左下に示したもので、石器の破片を一厘銭のような円盤状に形を整え、中央に孔を開けてあるもので、縄文晩期の遺跡から良く発見されている。糸をつむぐ紡錘車の一



第7図 にしやくどう遺跡出土 器台

田に溜つていて中に入ること出来ない。ただ畦畔の枯草の中に五十糎大の川原石から二十糎大の川原石など数個がいかたまりとなつてあつて、土製品の出土したところから出土したものだと物語られた。川原石には若干焼けているところが見られた。(挿図第七図は図版第二の10図の器台の実例図である)

以上のように川原石も既に取り上げられており、その石のあつたという付近を調査して見ようにも、現地が水浸しの状態では調査の致しようもなかつた。石の表面は

種かとも考えるが、未だ明らかでない。

五 城内遺跡

城内は久慈線種市駅の西方六軒にある山間の部落である。中世この地方を支配していた種市中務の居城のあつたところとして繁栄していたところであつて、江戸時代も種市地方としては最も栄えた中心地であつたが、今日鉄道沿線からはずれた城内は山間に取り残され、新しい変化をなすこともなく、山村部落として昔ながらのおもかけをとめてにすぎない。

昭和三十五年この城内地区の西方丘陵際の台地の開田が行なわれた際、円筒状の土製品が出土した。その報告を受けた長岡善一郎氏が、それを見て少し小さいが埴輪円筒ではないかと考え、古墳の存在が確かめられるかも知れないと思ひ、急拠その調査の必要を感じて調査計画をすすめることになり、小生に連絡して来たのが今度の調査の端緒となつたものである。

(1) ⑬ にしやくどう遺跡

円筒状の土製品(挿図第七図)の出土したところは、俗に「にしやくどう」と云われているところで、城内部落の民家の所在地より一軒ほど行つた山麓の台地である。現地に既に水田となつて耕作もされたきとて、着先(こ)で稲の切株がならんでいた。灌漑施設が不充分か、水が

火がかゝつて焼けている痕跡も見られるが、どのように用いられていたものかは全く不明である。

円筒状の土製品はその作り、焼成からみて焼台と考へて差支えないものと考えられる。焼き台となると二つだけであつたものかどうか、これを使用した焼窯となると、陶器を焼いたものではないかとも考えられるが、それに関係した遺物の報告はないので、また時をかえて調査して見ないとはいつきりしたことは云えない。本遺跡の地主は八木勝三郎氏である。

長岡氏がその付近から採集したというものに、糸切底の土師器の皿(図版第二の9図)があるが、これは前篇才三章で述べた如く平安時代の須恵器と一緒に出土する土師器と考へて差支えないものである。これがこの焼窯に係る遺物かどうかは不明である。無関係のものと考えられる可能性の方が大である。なぜなら、この付近の畑からは土師器の破片が採集されるし、現に今度の調査でも、最近開田整地されたばかりの場所に土師器の散布が認められていた。従つて、この付近は調査すれば土師器関係の遺跡の発見される可能性もあるところであつて、焼窯と無関係にそれ以前の遺跡が存在していたところであつたと思われる。

陶器の焼窯という推定は、この地にとつて思い及ばぬことかも知れないが、最近葛巻町の山間部の馬場に、記録も伝えないところに陶器の焼き窯が発見されている

例もある。^註この場合器台の形はそれより古い形をして
いることは明らかであるが、陶器の破片らしいものも発
見されていないので、明確な断定は今後の研究に期待す
ることにして一応の報告とする。^註吉田義昭・高橋昭治「岩
手町葛巻町田部字馬場所在の古かま遺跡について」(奥のふる里6号)

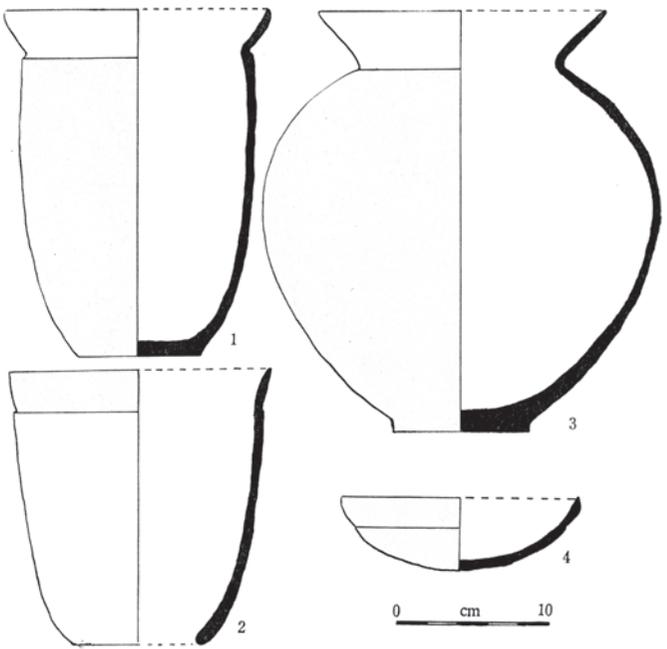
(口) 梅内遺跡^⑫

概況

本遺跡は城内部落の北はずれの山麓梅内敏雄氏宅の裏
手の畑である。梅内氏が自宅修理のための壁土を採取す
るため、裏手の畑の一角を削り取っていた際、高さ三十
糎の壺が出土したので、珍しいと思つて城内小学校に
持参して置いたものを、偶然長岡氏が目に留めた。今度
の調査で行つた際、長岡氏よりその報告を受けたので、
城内調査の折に現地を調査することにした。

遺跡は梅内氏宅裏手の丘陵麓の台地で、段丘となつて
いる一角を削り取つたところにあつた。行政区画は種市
町五十六地割二十八番地であるが、便宜梅内遺跡と仮称
する。

現地に行つて聞くと、壺はごく最近出土したばかりで、
完全に珍らしいので学校に見てもらいに持参したとの事
であつた。その他の破片の有無を確かめると、存在した
が散佚してしまつたとの事であつたが、庭先にコシキの



第8図 梅内遺跡出土土師器
1 甕；2 こしき；3 壺；4 皿

ので、金ヶ崎町西根土器と同一形式と考える。次に完形
復原土器について説明を加える。

壺(挿図第八図の3・図版第二の3)は高さ二十七・六糎で、
普通の大きさである。胴部は径二十六・二糎で比較的膨
らみのある方である。器面は刷毛で調整してあり上胴部
は斜行し、下胴部は下向している。貯蔵用の容器と考え
られる。なお、この種の壺は横手地区開田の際にも出土
しており、佐々木剛一氏が所蔵しているもので、参考に図
版才二の8図に示して置いた。これより若干小形である。

大きな破片が投げ棄てられてあつた。貴重な資料と早速
収集した。

壁土を取つて土器の出土したところに行つて見ると、
土器片が二三見えたので、そこを掘り掘げて見ると、一
群の土器片がかたまつてあつた。(図版第七の5)取り上げ
た結果一個の甕と皿が復原出来た。

この種の土師器が一括して出土するところに、堅穴住
居址の輪廓がはつきり発見される例は、金ヶ崎町西根堅
穴住居址群の例のほかしばしば体験しているもので、住居
址らしい痕跡が確かめられるのではないかと思ひ、土器
の出土地点を中心に拡張して見たが、既に相当破壊され
ていることもあり、はつきりしたものを確かめることは
出来なかつた。然し一個の完全の壺を手掛りに、現地を
調査した結果、一応土師器としては壺・甕・皿・甑(コ
シキ)の一括遺物を収集することが出来たのは幸いであ
つた。なお復原は出来なかつたが甕の破片は五個体分、
皿の破片は二個体分を数えることが出来た。

出土遺物

出土品は土師器だけである。完形品は壺一個、復原可
能は甕・皿・甑各一個であるが、破片は甕五個体分、皿
二個体分、甑一個体分の断片であるが、復原出来るまで
のものはない。作りは輪積法で、器面の調整にはへ
ラまたは刷毛を用いて仕上げたもので、轆轤を使用して
作つた土器はない。前器土師器といわれる種類に入るも

甕(挿図第八図の1・図版第二の1図)土師器の甕は長胴形甕
で、壺は頸部のくびれが著しいのに、頸部のくびれの著
しくなく胴部の膨らみのないものをいう。カマドにのせ
て湯沸しに用いたものである。下胴部に焼け焦げの痕が
ある。復原した形は高さ二十二・八糎、口径十八糎、底
径八糎である。器面は刷毛目を上下に用いて調整してあ
る。底は木葉底である。土師器の甕の完形品が「中野向
ながれ」から出土しているので、参考のため図版に示し
た。この形がこの時期の甕では普通の形である。

皿(挿図第八図の4・図版第二の4図)は坏・碗・盃などと云
われているものを一括して皿と称している。ここに復原
した皿は浅碗といわれるのが適当していると考えられる。
前期土師器の皿は底部が丸底であるのに特色がある。高
さ四・八糎、口径十五・二糎である。

甑(挿図第八図の2・図版第二の2図)はコシキと云われるも
ので、穀物を蒸すセイロである。従つて底部が開いてい
る。恐らく笹竹で編んだ敷物を入れて押えとし、その中
に穀物を入れたものであろう。これを甕の中に入れ、甕
の中の沸騰する蒸気によつて穀物を蒸したのである。こ
の甑は大和時代の農耕日本人の使用した容器である。本
遺跡で種市町ではじめて甑が発見された。恐らく他の土
師器の遺跡にも存在したのであろうが、壊れていたこと
などで破棄してしまつたであろうが、土器出土間もない
時期にたずねて、収集保存出来たのは幸いであつた。こ

の甕は高さ十八糎、口径十七糎、底径七・五糎である。

(イ) 城内館址 (図版第七の8図)

中世種市中務の居城したと云われる城内館址は城内部落より西南方大沢部落に行く途中に丘陵に位置する。周りに空濠を周ぐらし、上が平坦な台地になつてゐる。岩手県内に一般に見られる中世の館址の様式をとつてゐる。調査してみないと明らかでないが、その丘陵平坦地には館址時代の遺構の存在することが推定される。しかしこのような館は常時の生活の場所というより、非常の場所に立籠つた居城であらうと考えられる。

種市氏は南部信直に服し、慶長六年岩崎城攻めの時出陣し、その時の勢揃い一番備の中に、「六百石 種市中務 十八人 持槍二本 弓二張 鉄砲三挺」とある。妻は八戸弾正少弼政義の族新田左馬助政盛の女である。光徳の子孫三郎南部重直の時罪ありて、祿を没収せられ浪人となり、慶安二年十月病没して断絶したと云われている。しかし、その一族は後にまで存続している。

六、館野遺跡

長岡氏が城内小学校に保存されていた円筒下層D式(図版第三の4図)の特徴ある破片を持参して見せて呉れた。城内に行つた際、その出土地を問うたところ、その答は明らかでなく、ただ縄文式土器は館野に出土するからそ

こかも知れないという程度であつた。城内の調査が実際は何も無くて、予定より早く終了したので、その帰途館野遺跡を踏査して見ることにした。

館野は種市駅より城内に行く途中、城内の手前の部落である。遺跡は館野石蔵氏宅の裏手より北へ一軒ほど山合いに入つたところに開けた山麓の緩傾斜の畑である。畑は約十アールほどの雑穀畑で、畑の表面に石器や土器が散布している。殊に春さきの耕作前の畑の地表面からは土器や石器が採集された外に、畑の隅の小石を積み上げた場所からは石斧片などが多数採集された。

包含層の状態を調査するため、小範囲の試掘を行つたところ、沖積土は五十糎の厚さで形成されているが、表面採集の遺物に比して豊富な包含層らしきものには当らなかつた。従つて、本遺跡の遺物は殆んどが表面採集によるものである。

採集した遺物では石斧が特に多く二十数点を数えたが、図版才四の8図に示したものはその中特徴のあるもの四点である。大部分は敲製の粗雑な作りで、図の右上の二点のものである。磨製は少なく、右下隅のものと左側二段目の小形石斧の二点であつた。図の左側二段目三番目の異形の石器は削る道具の形をしている。広い意味の石匕の中に入れるべきかも知れない。

採集した土器は図版才三の6図に示したが、殆ど全部後期の土器であるが、ただ一片図の右下隅の晩期大洞A

式の破片が採集された。

以上昭和三十六年四月末から五月初めにかけて調査した内容とそれによつて知り得た遺跡の概況を写真図版や挿図を添付して報告した。短日時の調査で遺跡を一通り

第四章 その他の遺跡調査

一、昭和三十六年度岩手県内遺跡台帖作成調査

種市町担当者 佐々木剛一・重茂輝子・山屋洋子

本調査は以上の調査担当者の外、玉沢重作氏などの踏査によつて知られていた遺跡の現状を主として調査記録したものであり、才三章に調査報告した遺跡も含まれてゐるので、その分は除外した。文は記録に基き、草間が記述した。

1 藤好沢遺跡 粒来七地割二五

山林が近年一部開田されて、土器や石器が出土している。完全な石刀一点(図版第五の5図)出土している。

2 蝦夷塚遺跡 粒来

山林中にくぼ地あり住居址ではないかと云われているが、出土品もなく不明

3 長根塚古墳 長根

長根の丘陵台地の畑に二十米位はなれて二つの石塚がある。小笠原迷宮が古墳とし、岩手県史にも古墳として取り上げら

踏査した程度ではあつたが、多数の人々の御協力によつて、その知り得た收穫は少なくなかつた。報告はもつと遺物の内容を精細に述べたい点もあつたが、余り細部に亘るので一通りの説明にとどめたことをおことわりする。

4 黒マツカ遺跡 有家二十地割

山林のところ、水田になり殆んど破壊している、貝塚と思われるところあり、縄文土器や石器を出土すると共に、土師器の住居址もあつたらしい。

5 小子内貝塚 小子内

道路によつて殆んど破壊されているが、現在も尙貝殻が崖の断面に出土している。遺物は不明

6 長坂遺跡 長坂

畑で、縄文後期・晩期の破片が表面から採集される

7 袖山遺跡 八木袖山

畑で、表面から縄文中期・後期の破片や石器などが採集される。玉沢重作氏所蔵の石製模造品(図版第五の9図)の発見されたのもここである。

8 八木貝塚 八木第一地割

駅前の公衆浴場建築の際に多数の土器・石器など出土したといわれる。玉沢氏は晩期の完形土器二点と骨へらを所有して

- 9 ³⁰ いる。(図版第一の6図)
 ホックリ貝塚 八木第一地割
 八木駅の北の造船所付近で、鉄道敷設工事により殆んど壊滅したと考えられる。遺物は玉沢氏所蔵 土師器・骨角器(もり)などあり。
- 10 ²⁸ 大平 A 遺跡 大平
 八木駅の北方の墓地の上の畑で、畑の表面から土器片採集される。玉沢氏所蔵品に彌生式土器と縄文晩期の土器片の外、石斧・石鏃・石匕・石槍などがある、重要な遺跡である。
- 11 ²⁵ 西の館遺跡 上岡谷
 岡谷稻荷神社の北、西館は周りに空濠がめぐらされていて中世の館址の名残をとどめている。その館の山林草地中に縄文式土器やその頃の遺物が発見される。土器は縄文後期・晩期で、石匕・石鏃・石斧が発見されている外、土偶・土印・土版など種々の珍しい遺物が発見されている。(図版第六の7・8・9図) 玉沢氏の西館岡谷としているものは同じ場所らしい。
- 12 ²⁶ 上岡谷遺跡 上岡谷
 西の館遺跡西にある丘陵の南面した畑の表面から、縄文後期の土器が多数採集される。
- 13 ²⁴ 西館田遺跡 西館の田
 水田を開く際、多数の土器・土版・土偶が出土したといわれるが現在は無い。
- 14 ¹⁹ 大久保遺跡 大久保

- 15 ¹⁶ たけの子遺跡 (図版第六の5・6図)
 板橋から山合いに一・五軒ほど入った山林中で、戦争中開墾の際多数の土器が出土した。現在植林しているが、包含層は良好で重要な遺跡である。土器は縄文晩期。
- 16 ¹⁷ トチの木遺跡
 開田の際多数の土器・石器出土、現在は壊滅、縄文後期・晩期
- 17 ¹⁸ 横手遺跡
 近年開田の際土師器(図版第二の8図)出土、恐らく住居址が存在したと考えられる場所であるが、破壊されて痕跡もなす。
- 現在畑となつているところから縄文晩期の土器が出土するところがあることが長岡氏によつて確認されている。

二 その他の調査記録

本項は遺物の所蔵により、その出土地を記録するもので、現状調査はしていないので、知り得た範囲で記述することにす。

A 玉沢重作氏踏査遺跡

玉沢氏の踏査遺跡の大部分は遺跡台帖作成の際、調査員によつて調査記録されているが、それに残

- つた分について述べる。
- 1 ²¹ 和座遺跡 縄文後期(図版第一の7図)
- 2 ²⁷ 向山遺跡 縄文後期土偶(図版第六の3図)
- 3 ²⁹ 大平 B 遺跡 縄文早期尖底土器出土
- B 細越記平氏踏査遺跡**
 これは角浜中学校所蔵土器を中心にその出土地をたずねたもの。
- 1 ² 渋谷遺跡 縄文後期
- 2 ³ 伝吉 A 遺跡 土師器
- 3 ⁴ 伝吉 B 遺跡 縄文中期(図版第六の4図土偶)
- 4 ⁵ 北野沢 A 遺跡 縄文前期・中期土器(図版第三の5図)
- 5 ¹ 浜通遺跡 須恵器(図版第二の11図) 出土地、現在の漁協事務所付近と云われる。

C その他の記録

筆者が学校や民家を訪ねて知り得た資料により、その出土地を聴取したもので、向ながれ遺跡の外は現地を踏査してない。

- 1 ⁶ 北野沢 B 遺跡 現在水田と云われる。縄文後期
- 2 ⁷ 荒巻遺跡 縄文時代石皿(図版第五の4図) 出土、道路工事の際出土と云われる。
- 以上の二遺跡は佐々木利男氏の案内により、長岡善一郎氏と同行し、北野沢佐々木綱吉氏を訪ねて知り得たもの。
- 3 ⁹ 石倉遺跡 縄文前期・中期。
- 4 ¹¹ 櫃割遺跡 青龍刀形石器(図版第五の7図) 出土。

- 5 ⁵⁷ 向ながれ遺跡 土師器(図版第二の5・7図) 出土、第二回調査の際、佐々木剛一氏の案内により調査せるものであり、宅地及びその背後の畑。
- 6 ⁸ 大谷地遺跡 石棒(図版第五の6図) 出土地。井戸を掘る時出土という。
- 7 ⁴⁴ 久慈平遺跡 土師器破片出土。その精細な出土地不明。
- 8 ¹⁰ 麦沢遺跡 本遺跡は種市町内で相当内容豊富な遺跡と聞聞くが、その精細は明らかでない。
- 9 ²³ 戸類家遺跡 本遺跡は「九戸郡誌」に報ぜられている遺跡で、古くより土器・石器の出土地として知られている。昭和三十二年五月三日慶大江坂輝彌氏などの発掘により、土器・石器の外に、完全な土偶(図版第六の1図)が発見された。貝殻類も出土している点から、貝塚であつたと考えられる。

種市町内遺跡地名表

昭和38年3月30日

本地名表は現在知られているものを一応記入したものである。知られているものでもその内容が明らかでないもので省略したものがあるので、今後追加が予想され、その結果は更に新しい事実の明らかになることもあると考えられる。尚、遺跡の内容については本文の記事と参照出来る様に頁数を加えて置いた。尚これを機会に町内の出土品がみだりに散佚することがないようになれば幸いと考えている。

昭和三十八年九月一日
昭和三十八年九月十日

著者 草間俊一

発行者 高城 専太郎

印刷所 河北印刷株式会社

発行所 種市町役場